

# 伊能忠敬研究

史料と伊能図

二〇一七年 第八十一号

伊能忠敬研究会

武藏

伊能忠敬研究会

二〇一七年 第八十一号

史料と伊能図「伊能忠敬研究」

THE INOH TADATAKA JOURNAL  
STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.81 2017



## 柏木家に残された忠敬資料（六）

柏木 隆雄

本誌58号で司馬江漢の「地球全図略説」を記述してから暫く休稿している間に、佐原の記念館が所蔵している忠敬関係物が重要な歴史資料として国宝に指定された。いま柏木家から佐倉の歴博に寄託している資料も記念館に所蔵されていたなら、その中の何点かは国宝に指定されたのではないかと思う。忠敬没二〇〇年を前に、改めて寄託物を整理し記録に残しておきたいという願望から、忠敬研究会の有志数名をお誘いして佐倉の歴博を訪ねた。当日、立ち合っていた方は、歴博副館長の青山宏夫教授と横山百合子教授。月初まで江戸博で開催されていたシーボルト展で青山教授の解説を聴講し面識を得ていた。因みにこの催しには、柏木家寄託資料からもシーボルト事件関連の書付（本誌55号41P上段掲載）が展出された。

高橋景保が拘束されていた奉行内での調書の断簡で、景保はシーボルトに渡したのは、赤水図に手を加えた写しだと供述し、立合った当番目付の本目帶刀も、おおむねその供述を認めていた、といった内容のもの。

## 一、地球一覧図

三橋釣客の木版彩色図（図1）

マテオリッヂ系統の万国図で84×161センチ東西が押された横楕円形図で天竺（インド）がことさらに大きく描かれており、仏教的世界図の要素が加わっている。中国からリッヂ図が入ってきて

以来、いくつかの改訂が加えられたものの一つ。北極圏の黒塗りの部分は夜人国と記されている。

天明三年十二月に初版が出版されたが、折本の表紙が黄橙のものと青色と二種になっている。（図2）



図1 地球一覧図 三橋釣客 柏木家より歴博へ寄託図



図2 地球一覧図表紙

黄橙版を初版図、青色版を異版図と古地図業界では区別しているようだ。初版図の題言説明は「是図ハ五大洲ノ目ニ分テ一世界ヲ統轄ス」とし、五大洲の縁取りを色付し島嶼と湖に色を入れているが、異版図では彩色が全域に及んでいる。異版図の題言説明は「加ルニ異國海上ノ路程ヲ以テ云々」奥付は初版図は二書林名、異版図は、京・大坂・江戸日本橋の三書林名が記されており人気の刊行物であったと想像できる。

忠敬資料の地球一覧図は青表紙、三書林名の異版図であるが、これと同様のものを東洋文庫で閲覧しコピーを取り寄せた（図3）。

この図は東京丸ノ内の三菱一号館美術館での三菱展でも公開展示されていた。この図と同版の寄託図を比べて見ると、色調の異なるのが気にかかる。

寄託図の方が手彩色を加えたのか絵画的で美しい。以前、忠敬研究会で明治大学蘆田文庫の伊能図を閲覧したが古地図の膨大なコレクションの中には当然ながら初版図があった。このほかにも、鹿児島大学玉里文庫に島津家からのものと思われ

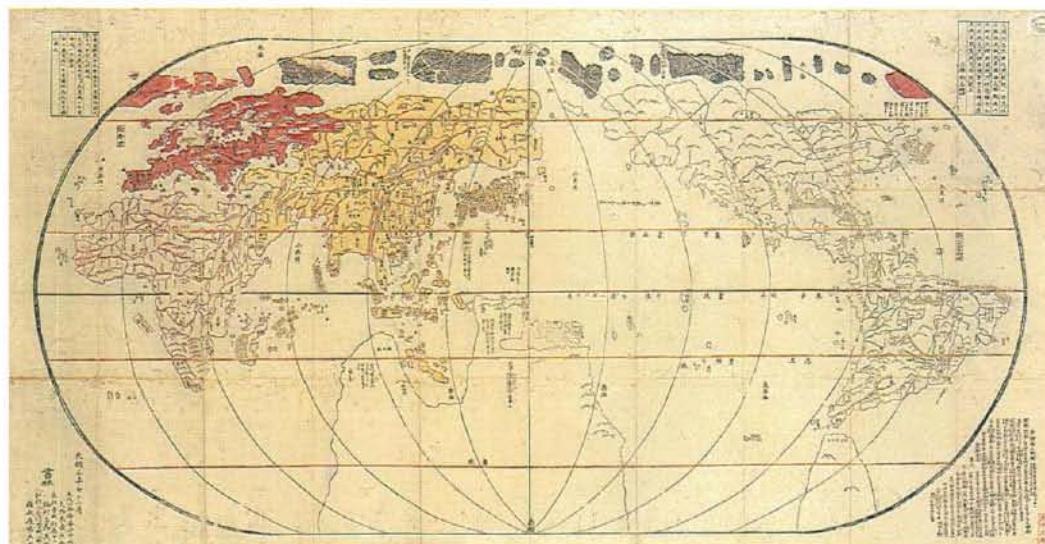


図3 地球一覧図 東洋文庫所蔵

る異版図が収蔵されている。作図者の三橋釣客、本名は中根玄覧か。江戸博の図書館で人物像を調べたが、どの辞典、人名録にも記載がない。どうたか判つていたらぜひご教示をお願いしたい。

## 二、忠敬が模写した世界図

伊能家から記念館に寄贈されたこの二つの円球が接した世界図は忠敬が手写したと言われている。

(図4)

左に西半球、右に東半球の直径89センチ、忠敬が出府した頃のもの。前述の「地球一覧図」にも関連し、忠敬の世界観を伺い知る意味でも一興と思、少々の考察を試みる。

この世界図の内容の分析は、本誌38号に福田弘

行氏が記述しておられるので割愛する。

伊能図は、地球を球形とし、天測により緯度を求めることを軸とし、距離を間繩、鉄鎖、量程車などを使用し歩測によって実測し、その距離に比例した径緯度線を引いて作図した。球形の地球と世界図における日本の位置付けは常に忠敬の頭の中にあつたと思う。

イエズス会の宣教師マテオリツチの世界図「坤輿万国図」が日本に入ってきてから、石川流宣、渋川春海、長久保赤水などの先覚者が様々な世界図や地球儀を作成し出版した。

天明から寛政期にかけては、オランダ交易からの世界図も加わり、改訂を重ねたより高度な世界図の刊行が相次いだ。桂川甫周、林子平、司馬江漢等の世界図が今に残る。世界図は当時、知識階級の間では人気の刊行物で珍重されていた。

司馬江漢との交流が深かった忠敬は、地球の仕組み、世界図を通しての世界観、それに天文暦学

の知識など、江漢から多大な学識を得ていた。

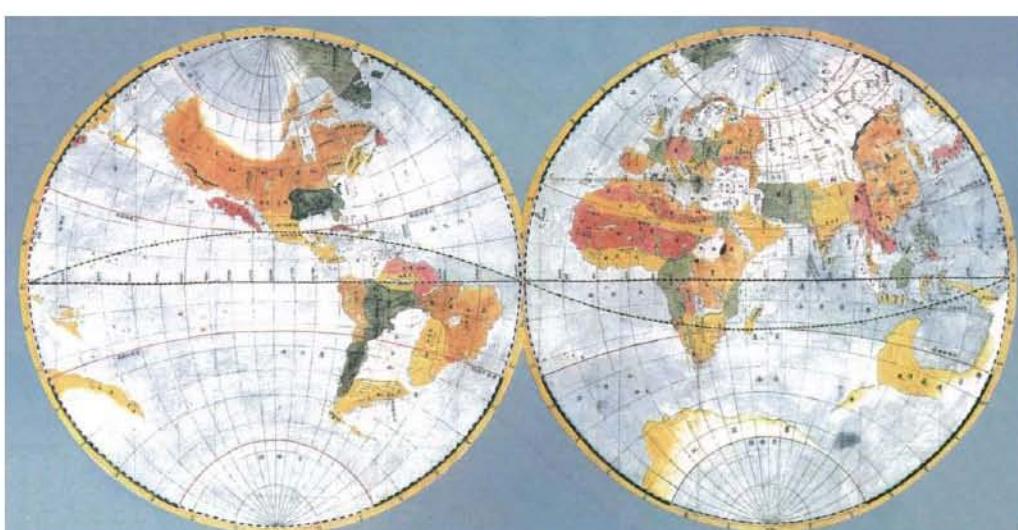


図4 地球図 伊能忠敬 模写

江漢が東西半球の銅版による「地球全図」を刊行したのは寛政四年、同時に解題となる「地球全図略説」を上梓した。この書は、地球の構造、日蝕、月蝕の仕組みなどを易しく解説したもので、柏木家から歴博への寄託資料に含まれており、本

誌58号で若干の解説を施した。

### 三、忠敬は誰の世界図を模写したか

江漢の「地球全図」と忠敬の模写した地球図を比べてみると、両半球の五大陸の描き方の位置関係が明らかに異なる。そこでもう一つの世界図の林子平のそれ（図5）と比較してみた。

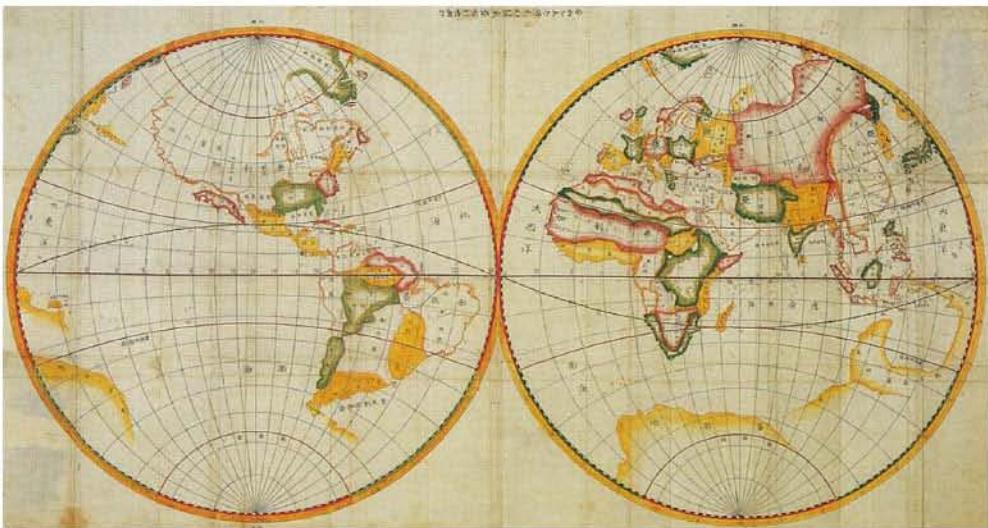


図5 林子平の世界図 仙台市博物館所蔵

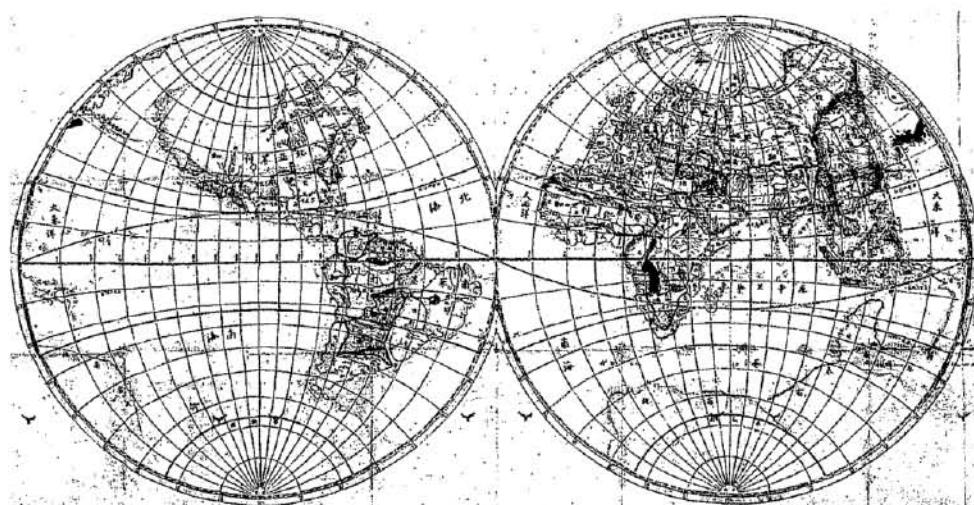


図6 万国図 中山武成

この図には安永九年（一七八〇）と記されているので、江漢図より10年ほど前の作図である。忠敬の模写図はこの図に驚くほど似ていて、私はまさにコレだと確信を深めた。図に記入された大西洋、大東洋、赤道、南極線などの文字入れの位置は多少異なるが、五大陸の図形はほとんど一致する。

ここで一件落着と思った矢先にもう一枚の世界図を見つけた。安永八年（一七七九）作図の、中山武成による「万国図」（図6）である。

中山武成は代々オランダ通詞の家柄の出、武成の模写した世界図は蘭学事始の頃輸入された地球図、世界図からの模写と識者は言及しており、林子平はこの図を筆写したものと思われる。そうなると、忠敬の世界図は林子平図を介した中山武成の孫図ということになる。

忠敬が隠居を許され、江戸に出たのは寛政七年、満を持して佐原にいた頃に、仙台藩とは稼業のつながりからの縁で、仙台藩典医の桑原隆朝の娘、信を三番目の妻として迎えた。林子平の実姉は伊達宗村の側室であり、先代桑原隆朝の娘婿は工藤平助、この工藤平助に林子平は江戸で兄事し、そして桂川甫周、大槻玄沢と交流を持ち蘭学を学んでいた。忠敬の出府の前後には林子平の世界図を入手できる環境は整っていたのである。

（了）

#### （参考資料）

東洋文庫名品展図録

蘆田文庫目録

伊能忠敬記念館

忠敬の地球模写図

仙台市博物館

林子平の世界図

伊能忠敬研究

第38号

香取市佐原

柏木俊一

（歴博への寄託者）

東京都

齊藤芳弘

# 伊能図の使われ方

菱山 剛秀

## はじめに

伊能図は明治以降、国家による新たな地図が完成する前まで、全国を実測で作成された唯一の地図として政府機関で利用された。伊能図を利用した主な機関は、行政の中心である内務省地理局と国防機関である陸軍省参謀本部・海軍省水路部である。

このうち陸軍省参謀本部（以下、「参謀本部」）は、全国の地図整備に着手する一方で、当面の利用に供するため、伊能図を利用して応急的な地図整備を行った。

伊能図の利用

陸地測量部沿革誌によれば、参謀本部は、伊能図の利用に当たり、明治9年に伊能図の模写を行っている。

（西南の役図）

参謀本部が伊能図を模写した頃、士族の特権廢止政策への抵抗が強まり、士族の反乱を政府軍が鎮圧する事件が相次いだ。士族反乱の最大のものが、西南の役である。この戦いで官軍は西郷軍に対し数では圧倒的に有利であったが、地理に強い西郷軍の抵抗に遭い手を焼いた。このため、政府は急遽九州の地図を用意する必要があり、模写したばかりの伊能図や既存の資料を使い、西海道全図、熊本近傍図、薩摩大隈日向三国図等を作成した。しかし、これらの地図は縮尺が小さく、地域の概要を把握するに

は十分だったと思われるが、実戦にはあまり役に立たなかつたようで、6月には現地に局員を派遣し、大縮尺の軍用地図を作成している。

## （軍管図）

伊能図から作られた応急的な地図は、実戦の場ではあまり役立たなかつたようだが、地域の概要を把握するためには、どうしても地図が必要だつたのだろう、明治11（1878）年の末から翌年明治12（1879）年の間に全国六軍管の軍管図が伊能中図と同縮尺で作成された。

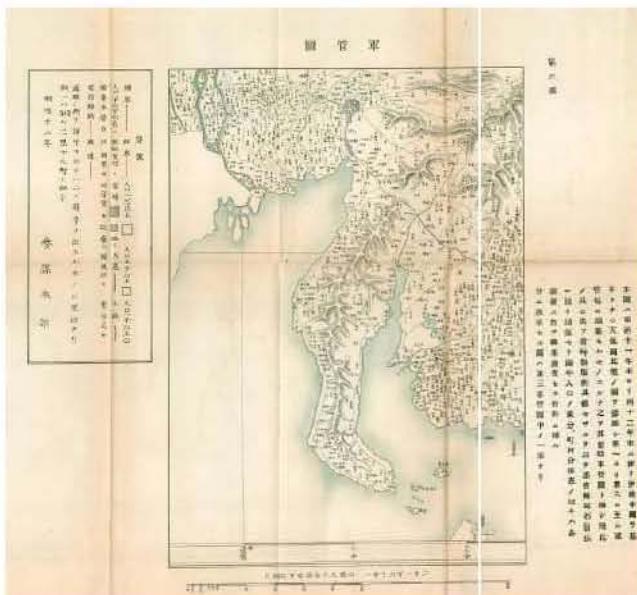


図3 軍管図（陸地測量部沿革誌附図より）

## （輯製二十万分の一）

参謀本部に設置されていた組織を基に、明治21（1888）年に陸地測量部が設置され、我が国の地図整備事業が計画的に実施されるようになるが、それに先立ち、当面整備が必要な地域に限つて応急的な測量を実施したり、既存の資料を使つた地図整備が行われた。

中でも、「輯製二十万分の一」は、全国をバーする地図として、緯度方向40分、経度方向1度の切図として整備されることになり、明治17（1884）年に編集が開始され、明治26（1893）年までに全国の図が完成している。

この地図も伊能図を骨格とし、前出の軍管図と同様、天保国絵図や地方から収集した調査資料等を基に輯製（編集）されたものである。

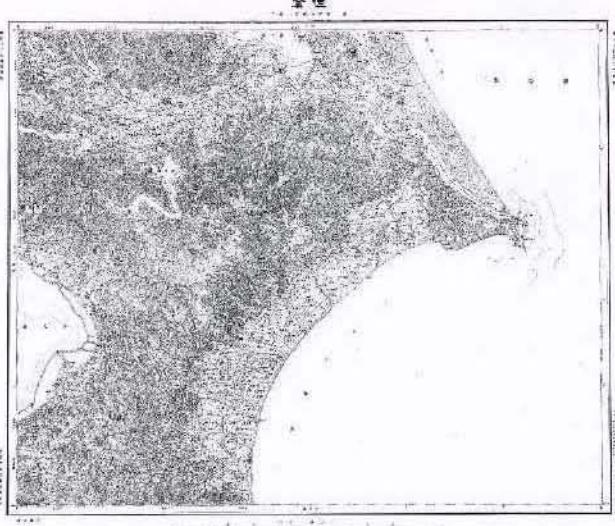


図4 輯製二十万分一図「佐倉」（明治20年輯製）

## 伊能図の利用方法

### (伊能大図)

軍管図は、伊能中図と同縮尺で作られているから、骨格となる海岸線や街道の位置は伊能図の複製法と同じ針突法、あるいは薄い紙を重ねてトレースする方法が使われたと思われるが、複製二十万分の一の作成には縮尺の変更が伴うため、針突法は使えない。

複製二十万分の一は、中図より縮尺が大きいため位置の精度を確保するうえでも、より大縮尺の大図が使われたと考えられる。この場合、大図の三万六千分の一から二十万分の一に縮尺を変更する方法として、全体を小域の方眼単位に分割し、元図と新たに作る図で方眼の大きさを変えて方眼内が相似形になるよう移写する方法が採られたと考えられる。

米国議会図書館の大図には、作業用と思われる5 cm間隔の方眼が引かれているものが多い。また、地図に貼り付けた付箋が残されており、伊能図の利用方法を知る貴重な手がかりといえる。

大図、No. 94の図には、「此印分寸ナリ 二十万ニス」の付箋があり、これは「複成二十万分の一」の作成のための指示と思われる。

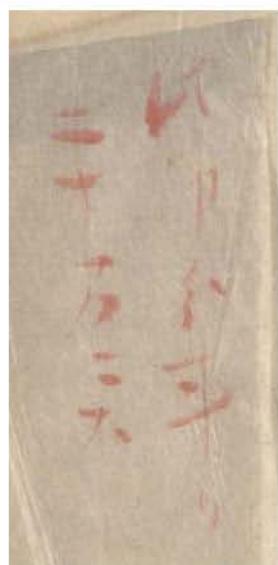


図6 No.94(高崎・秩父)の付箋

20万の1にする場合は新たに作成する地図の原図に9 mmの方眼が引かれていたと思われる。大図5 cm (50 mm)の範囲を9 mm方眼に縮図するための方眼である。すなわち、 $1/36,000 \times 9/50 = 1/200,000$ となる。

一方、No. 56の図には、この半分の2.5 cmの方眼が引かれており、さらに測線部分にはこれを5分の1にした5 mmの方眼（南北方向は目盛のみ）が薄く引かれている。

また、No. 56の図には、大図を拡大して2万分の1図を作成する」とを指示する付箋が貼られている。付箋には「此ズ 三万六千 日出山ヨリ笠石迄 二万分ニ伸ス 9/5ニス 子午線共」と書かれている。

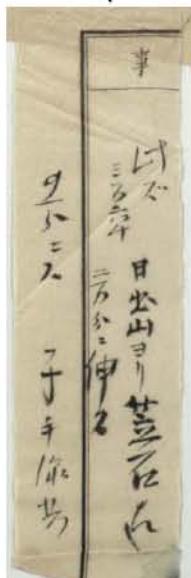


図7 No.56(福島)の付箋

この指示に基づいて作成された地図が何かは確認されていないが、このとき作成された2万分の1の地図の原図には、9 cm、4.5 cm、9 mmの方眼が引かれ、大図の5 mm方眼内の图形が、新たに作成される2万分の1の図の原図に引かれた9 mmの方眼に拡大して移写されたと考えられる。

大図No. 56の付箋にある「9/5ニス」は、5 mmの方眼を9 mmに拡大するという意味である。すなわち、 $1/36,000 \times 9/5 = 1/20,000$ となる。



図6 米国議会図書館蔵伊能大図No.56(福島)の方眼

当時作成された2万分の1の地図は「軍管地方迅速測図」である」とから、記録にはないが、

伊能大図が2万分の1迅速測図の骨格として利用された可能性も考えられる。

しかし、この細かい方眼があるのは限られた部分のみなので、むしろ演習用地図など応急的に作成された地図に利用された可能性が高いのではないだろうか。

いずれにしても、大図は20万分の1だけでなく2万分の1レベルの地図の骨格としても利用されていたことを裏付けるものといえよう。

(伊能中図)

中図は、軍管図の作成にも使用したが、軍管図は中図と同一縮尺で作成されており、そのまま移写すればこと足りるので、わざわざ方眼を使用して移写する必要はない。

一方縮成二十万分の一は、縮尺が異なるので、縮尺を変換する仕組みが必要である。さらに、縮成二十万分の一は、経緯度による切図として作成されるので、経緯度で区切られる図郭の範囲を決定する必要がある。

しかし、伊能図のうち、大図には経緯線が描かれていない。中図には経線が表示されているが、経線の基準は日本が独自に決めた京都であるから、国際的な基準による経度を引き直す必要がある。わが国で経緯度原点が一応確定したのは明治18年であるが、経緯度の観測はこれ以前から行われていたので、二十万分の一という縮尺では大きな影響はなかつたかもしれない。

もう一つ注意しなければならないのが投影法の問題である。伊能図は実測による図であり、部分ごとに現地と相似形といえよう。しかし、全国を繋ぎ合せた場合は、全体に歪が生ずるはずである。中図や小図はこれをどのように処理したのであろうか。

中図を例に見ると、緯線は赤道に平行な直線で表され、経線は南に行く従い開く直線で表されているように見える。

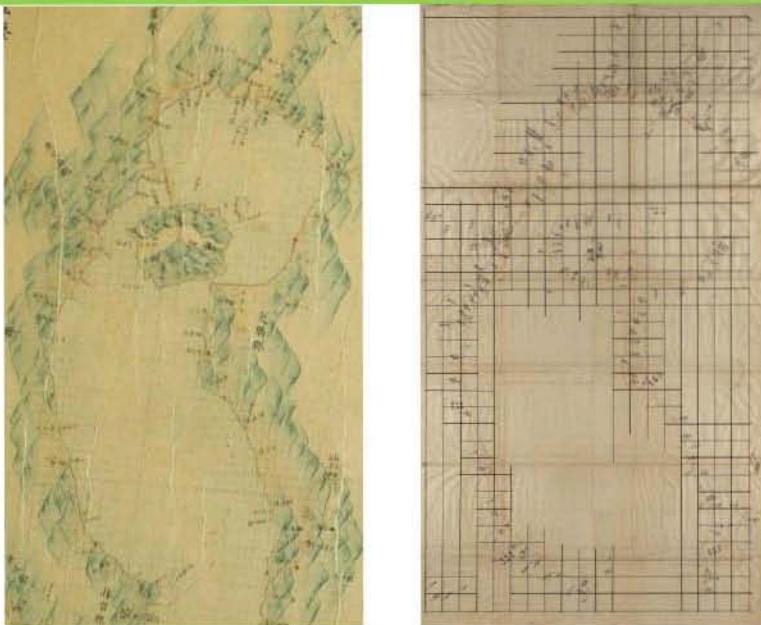


図7 鹿児島付近の中図（左）と大図（右）

影したものではないと考えた方がよさそうである。

(サンソン図法の投影式)

$$x = R \lambda \cos \phi \quad y = R \phi$$

(R: 地球半径、λ: 経線間隔、φ: 緯度)

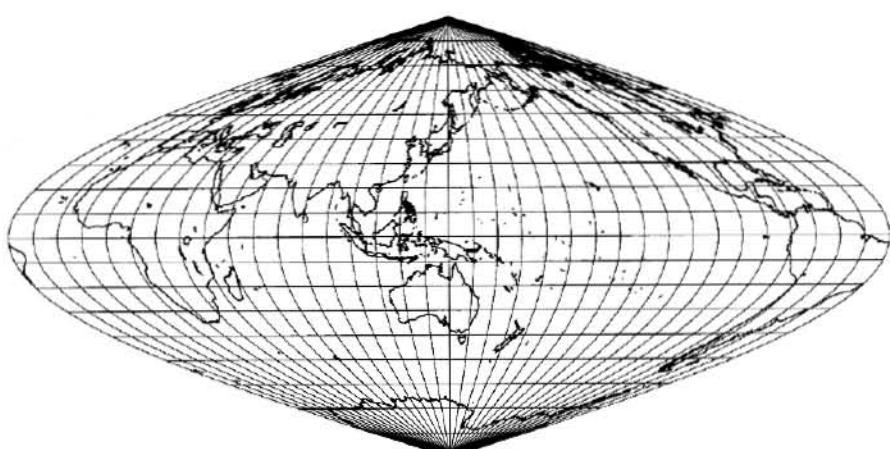


図8 サンソン図法の経緯線網

伊能図の投影法は、従来からサンソン図法といわれているが、サンソン図法は経線(x)と緯線(y)が次の式で表され、緯線は直線になるが経線は曲線になるので、サンソン図法で投

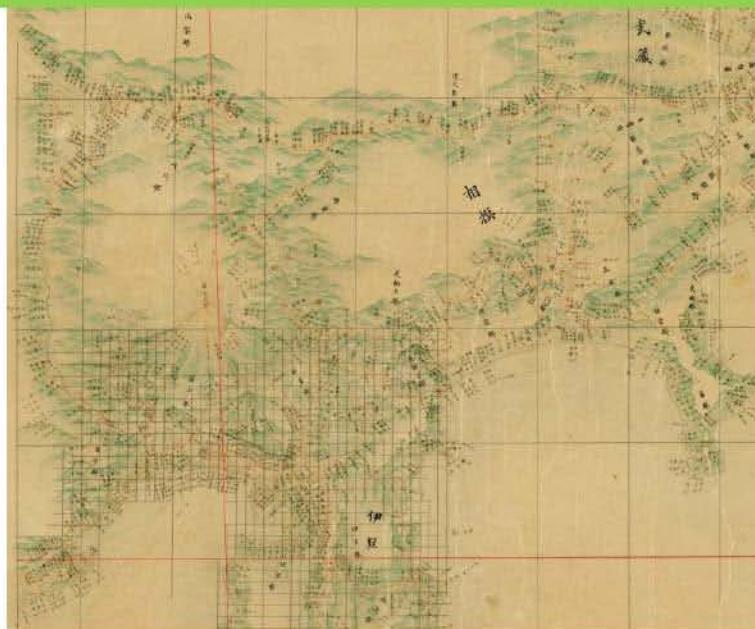


図9 国土地理院蔵伊能中図（関東部分）

従つて、緯度はほぼ正確だが、経線は中央経線から離れるに従い実際の経度とかけ離れた位置に描示されることになる。

以上のこと念頭に国土地理院の中図を確認してみる。

仮に、中図がサンソン図法で描かれているとすれば、経線は中度を離れるに従い、東西に傾きが大きくなり、描かれている海岸線や測線も歪むはずである。しかし、中図と大図を比較しても中図で生ずるはずの歪みはほとんど認められない（図7参照）。したがって、中図は、大図を縮小し、単純に接合しただけのように見える。そう考えると、中図に描かれている経線は、地図の投影とは関係なく、例えば平均的な緯度によって計算された経線間隔を基に、形を整えるためだけに引かれたものと考えられる。これは、忠敬が経度の測量に成功していないことから、やむを得ない措置だったのだろう。

通常小縮尺の広域な地図を描く場合は、まず経緯線を描き、その経緯線で囲まれた範囲の矩形内に元図と相似形の図形を描くのが一般的であるが、伊能図の中図は、大図を縮小して接合集成した後から、緯度観測の結果や計算で求めた経線間隔を基に経緯線を書き入れたよう見える。

従つて、緯度はほぼ正確だが、経線は中央経線から離れるに従い実際の経度とかけ離れた位置に描示されることになる。

以上のこと念頭に国土地理院の中図を確認してみる。

国土地理院所蔵の伊能中図（関東）には、1度単位の経緯線（図9の朱線）が引かれている。また、これとは別に10分単位と思われる方眼線（図9の黒線）が引かれ、部分的に一分単位の細かい方眼も引かれている。

この方眼の横線は緯線と一致するものの、縦線は経線とは方向が一致しない。

経緯線と方眼の関係を考えると、経緯線は、元図になった中図に描かれていたものであるが、方眼は元図とは関係なく、何らかの目的をもつて後から描かれたものであることが明白である。

すなわち、この図には元の中図に描かれていた京都を中心とし、計算によつて求めた経線とそれとは無関係に後から書き加えられた垂直な方眼の縦線による経線の2種類の経線が描かれているとも考えられる。

なぜ、このような経線（方眼）が書き加えられたのだろうか。

仮に、中図がサンソン図法で描かれているとすれば、経線は中度を離れるに従い、東西に傾きが大きくなり、描かれている海岸線や測線も歪むはずである。しかし、中図と大図を比較しても中図で生ずるはずの歪みはほとんど認められない（図7参照）。したがって、中図は、大図を縮小し、単純に接合しただけのように見える。そう考えると、中図に描かれている経線は、地図の投影とは関係なく、例えば平均的な緯度によって計算された経線間隔を基に、形を整えるためだけに引かれたものと考えられる。これは、忠敬が経度の測量に成功していないことから、やむを得ない措置だったのだろう。

一方、中図が大図を縮小して接合集成したものとすれば、垂直な経線は、磁針方位を基準とする忠敬の測量の成果そのものであり、局部的な形状は、現地と整合するはずである。

輯成二十万分の一の投影法は、多面体図法を採用している。この図法は、経緯線の区画ごとに等脚台形を設定し、その範囲を平面と看做して描くものなので、垂直な経線で囲まれた図の方がより近い形状になる。この図法は、理論的には平面で接合できなくなるが、広域を考えなければ、小域では現地と整合するとみてよい。

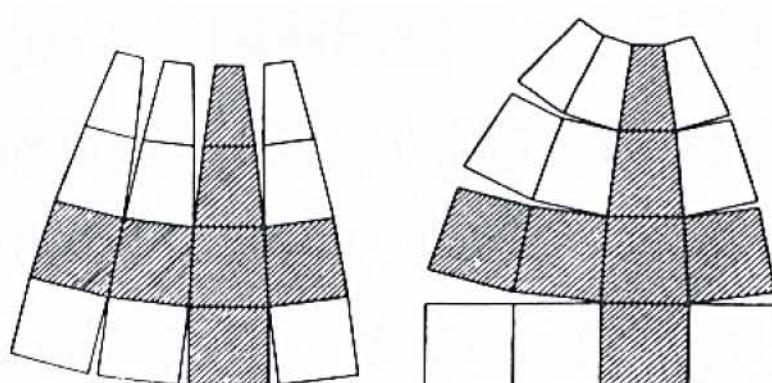


図10 多面体図法における図郭線の模式図

## 伊能図の経線

他の機関が所蔵する中図や小図の経緯線が、比較的太く描かれているのに対し、国土地理院所蔵の伊能中図を見ると、経緯線がほとんど確認できない。公開されている画像を最大に拡大して、ようやく確認できる程度である。よく見ると鉛筆書きで下書きしたように薄くて細い線である。前掲の関東地方の経緯線は、そうした線を見やすくするために、筆者が補描したものである。この中図は、写図が作られて間もなく、軍官図の元図として使用された記録があるが、軍官図の場合は、縮尺が中図と同じなので、そのまま贋写すればよいはずである。

ところがこの図には、経線の位置を無視したような直角の方眼線が引かれている。ただし、緯線は方眼と一致しており、大きな方眼は1度を6等分している。そう考えると、一見経緯度とは無関係のような方眼の縦線は、経線を描いていると考えられる。

伊能図の測量は、磁針方位を基準に角度を測り、間繩や鉄鎖などの物差しを使って距離を正確に測り、更に天文観測を行つて、観測地点の緯度を確認している。この結果、緯度は赤道に平行な線になり、北を指す経線は、緯線と直角でなければならない。伊能測量隊の測量結果は全国どこでもこの条件は変わらない。

測量の誤差を考えると、おそらく、大図の範囲では、地表面を平面として扱つても、誤差の範囲で收まってしまうと思われる。したがつて、球面を平面に投影することを考えなくて、地図は現地と縮尺も方位もほとんど誤差なく整合することになるはずである。

右：伊能中図（関東）部分

朱線の方眼は、経度間隔1度、  
緯度間隔40分（筆者補描）

下：輯成二十万分の一

東京（上）  
横須賀（下）

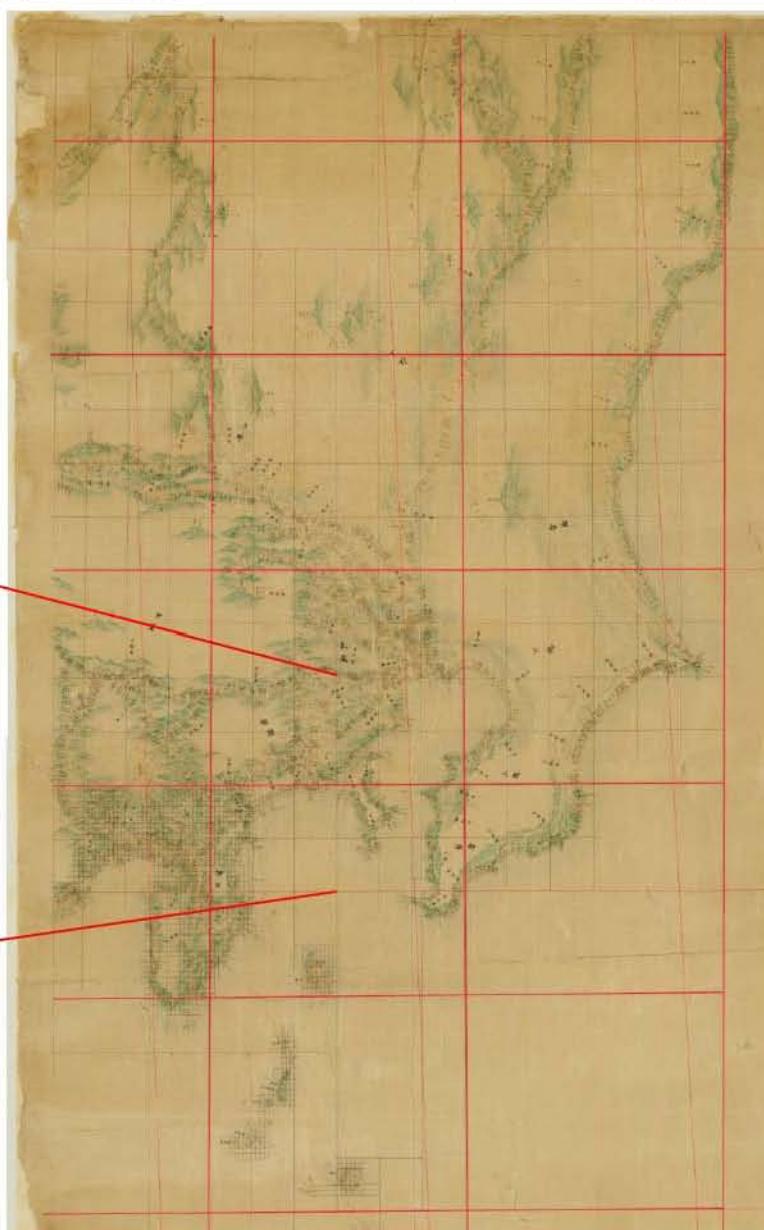
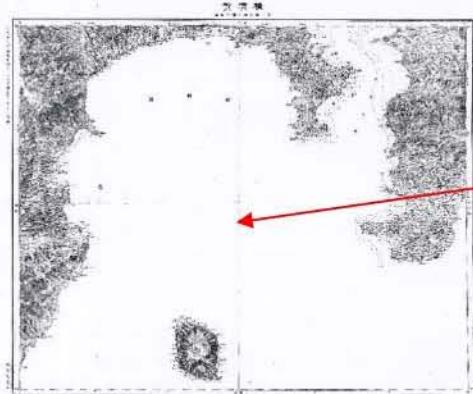
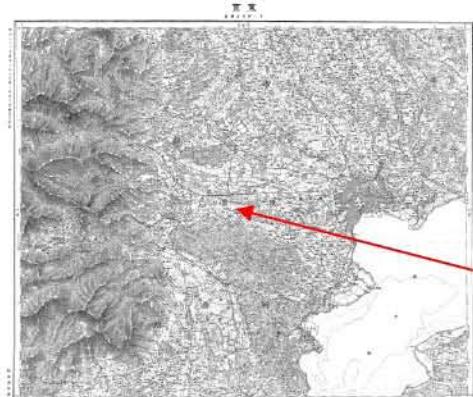


図11 国土地理院所蔵 伊能中図に描かれた方眼と輯成二十万分の一の図郭の関係

このことを参謀本部の地図技術者は、意識していたのだろうか。経緯度で区画された輯製二十万分の一の範囲は、伊能図に描かれていた経線を無視するように、緯線に直角に引かれた10分ごとの方眼と整合している。（図11参照）その方眼の縦線は、現在の地図の経線とほぼ一致するのである。

この矛盾をどう考えればよいのか。

輯製二十万分の一の図郭は多面体図法なので図郭の形状は等脚台形になる。ただし、上辺の緯線と下辺の緯線の長さの差は小さく、図郭全体で3mmから5mmほどである（緯度が北に向かうほどこの差が大きくなる）。伊能中図から輯製二十万分の一図に移写する場合、10分ごとの方眼単位で行つたとすると、上辺と下辺の差は、左右それぞれで0.3mm程度となり、描画誤差の範囲に收まってしまう。

伊能図の投影法は、厳密には正確とは言い難いが、現地と距離、方位、緯度が殆ど整合するので、実用上は全く問題がないといえるだろう。すなわち、伊能図は、「実測図」そのものであり、例えば現地で平板測量により描いた大縮尺の地図が投影の問題を無視しているのと同じである。

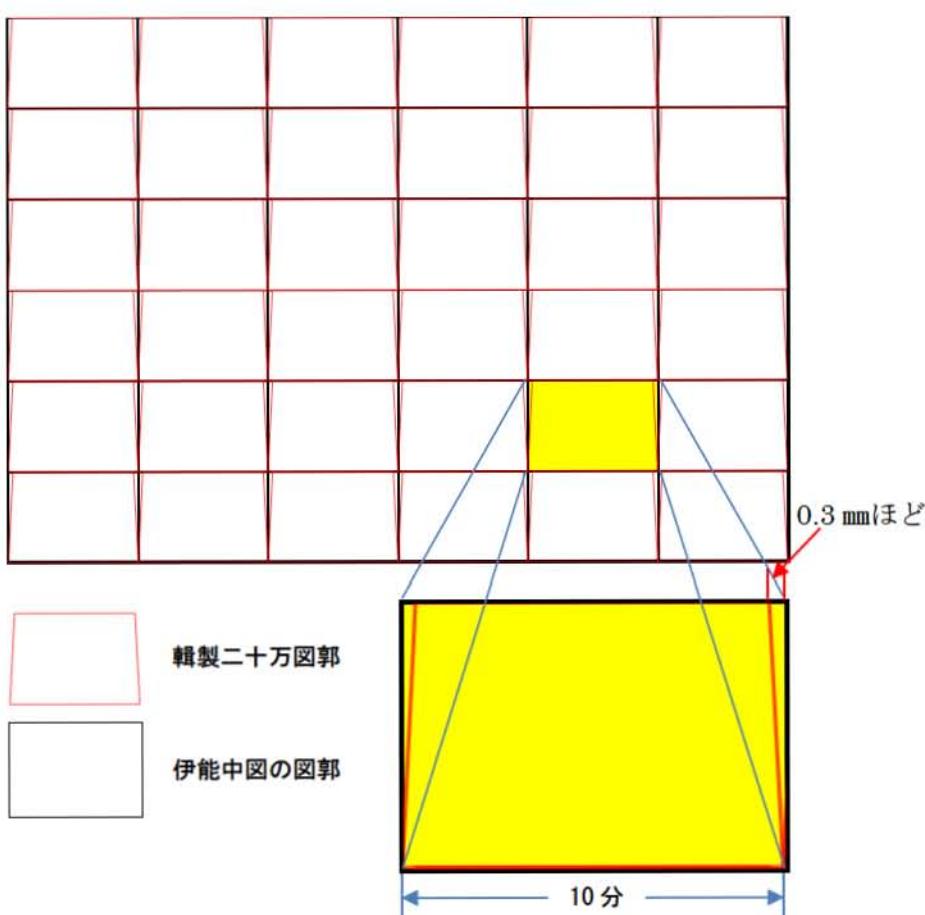


図12 国土地理院所蔵の伊能中図に描かれた方眼と輯成二十万分の一の図郭の関係

伊能図大図は、実測した値により、描かれており、地図投影は意識されていないと考えてよいだろう。しかし、中図や小図は縮小して繋いで平面に描き表わそうとすると、どうしても矛盾が生ずるはずである。ところが、現存する中図や小図は、上記のように実際の経緯線は描画誤差と思われる部分を除けば、ほぼ直行する直線で描かれている。

念のため、国土地理院所蔵の関東地方の中図に描かれた方眼の緯線間隔を調べてみたところ、若干ではあるが北に向かうほど緯線間隔が伸びている。すなわち、伊能中図や小図は、単に縮小しただけではなく、形が歪まないよう経線長を基準に緯線間隔の割合を伸ばしたメルカトル図法に近いと考えられるが、現段階ですべての図を確認していないので、今後の検討課題としたい。

## 「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第十六回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

監修 渡辺一郎

編著 井上辰男

【第七次測量】（九州第一次）天草諸島～大分

自 文化7年10月28日 至 文化8年3月6日

宿泊日・旧暦 文化7年10月 (1810)		宿泊地		現・市町村名		宿泊宅		天体観測		大図番号
8 *	7 *	6 *	5 *	4 (* 31)	3 (* 30)	2 (* 29)	1 (* 10. 28)	下島 魚貫村	熊本県天草市	
同 富岡町 【支隊】	同 高浜村 【支隊】	同 下津深江村 【支隊】	同 高浜村 【支隊】	同 都呂々村 【支隊】	同 崎津村 【支隊】	同 福連木村 【支隊】	同 崎津村 【支隊】	同 下田村	本陣庄屋 佐々木覚右衛門	二〇三
同 苇北町 【支隊】	同 天草市 【支隊】	同 天草市 【支隊】	同 天草市 【支隊】	同 天草市 【支隊】	同 天草市 【支隊】	同 天草市 【支隊】	同 天草市 【支隊】	同 天草市	本陣庄屋 佐々木覚右衛門	二〇三
末屋市三郎 本陣荒木三左衛門	庄屋源作 庄屋西島郷助	庄屋源作 吉田宇治之助	庄屋酒井平太兵衛 折七	本陣庄屋 吉田宇治之助	本陣庄屋 吉田宇治之助	本陣庄屋 吉田宇治之助	本陣庄屋 吉田宇治之助	天草山護國院崇円寺 淨土宗 茂七郎	本陣庄屋 倉田武左衛門	二〇三
都呂々村字木場より内田村を歴て富岡町迄測る。	都呂々村字木場より逆測、下津深江村字下萱を歴て小田床 村字鬼岡浦横杖迄測る。高浜村字西平より高浜本村字舟津を歴て小田 床村字鬼岡浦横杖迄測る。	崎津村字錦瀬より字横浜を歴て高浜村字才ホソウズ迄測 る。恒星測定	福連木村字山ノ口より猿越峠を歴て都呂々村字木場迄測 る。恒星測定	一町田村より五太郎峠を歴て福連木村字山ノ口迄測る。 同所逗留測。崎津村字落戸より崎津村を歴て字錦瀬迄測 る。恒星測定	早浦村字吉野浦より久留村枝小島字四名田を歴て字白岩、 崎津村・久富村界迄測る。字箱崎より崎津村字落戸迄測 る。恒星測定	下田界字鎌より下田村、一町田村を歴て津留村迄横切測 る。恒星測定	同所逗留測。久留村飛地下田界字鎌より久留村枝主留を歴 て早浦村字吉野浦迄測る。ヒレ島一周を測る。久留村飛地 字口ヶ鼻より字白岩、崎津村・久富村界迄測る。字箱崎よ り枝小島を歴て久留村飛地字鎌迄測る。	魚貫村大首より大江村飛地小鍋を歴て龜浦村止宿を過、字 口ヶ鼻迄測る。	り魚貫村大首迄測る。福津入江南側より鳶巣入江を歴て魚貫湾を回 り魚貫村大首迄測る。福津浦入江西側半測。恒星測定	二〇三
二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三

												宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	天体観測	大図番号		
22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4		
*	*	*	*	*	*	*	*													
(	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
同 棚底村	同	同 宮田村	同	同	上島 湯船原村	同	上島 下浦村	同	同 楠浦村	同 町山口村	同 下河内村	同 御領村	同 二江村	同 御領村枝大島	本陣庄屋長島増太郎 百姓順之丞 百姓正左衛門	富岡町より二江村を歴て鬼池村字力口崎迄測る。通詞崎一 周測る。二江村より下内野村制札迄横切測る。	同	支隊、同所逗留測。富岡岬を回る。本隊、都呂々村にて中食、無測で富岡町へ着。恒星測定	二〇三	
同 天草市	同	同 天草市	同	同	同 天草市	同	同 天草市	同	同 天草市	同 天草市	同 天草市	同 天草市	同 天草市	同 天草市	同 家隠居宅	本陣庄屋大谷小十郎 本陣庄屋新五左衛門 庄屋鶴田新五左衛門 庄屋長岡五郎左衛門 大庄屋	御領村枝大島より御領本村を歴て字串迄測る。大島一周測る。 御領村字串より本戸馬場村字津金淵迄測る。下河内村字懸水より本戸馬場村字津金淵迄測る。下内野村を歴て下河内村を歴て御領本村を歴て字串迄測る。大島一周測る。	二〇三	二〇三	二〇三
庄屋鬼塚元左衛門	同	中村清石衛門	同	同	庄屋猪原勘兵衛	同	庄屋金子栄吉 柳右衛門	同	藤六 清助 宗像三郎兵衛 本陣庄屋	同	龜川村字瀬戸より楠浦村字舟津迄測る。龜島一周測る。 上島志柿村字瀬戸より下浦村枝舟津迄測る。「下島」楠浦村字中越より字舟津迄逆測。二色島一周を測る。 同所逗留測。楠浦村字中越より大田尾村字浦ノ迫を歴て大田尾村測所迄測る。 横島一周測る。	同所逗留測。下浦村字舟場より字垣塚口迄測る。 下チ子ガ島・上チ子ガ島一周測る。恒星測定	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三			
宮田村字落人鼻より浦村字中浦を歴て棚低村字龜石鼻迄測る。平瀬島半周測る。恒星測定	同所逗留測。古江村字洲ノ浜より宮田村字落人鼻迄測る。平瀬島半周測る。	湯船原村の湯印より古江村字洲ノ浜迄測る。	雨天逗留	同所逗留測。下浦村字垣塚口より下浦村、馬場村境迄測る。	同所逗留測。下浦村字舟場より字垣塚口迄測る。	同所逗留測。下浦村、馬場村境より馬場村、湯船原村界の大川を越て湯印を残し湯船原村本陣を歴て草積峠迄測る。	同所逗留測。下浦村字舟場より字垣塚口迄測る。	西天草昨日測量済。乗船東天草へ着。	西天草昨日測量済。乗船東天草へ着。	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇		

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	天体観測	大図番号										
6 *	5 *	4 *	3 *	2 *	1 *	文化7年11月 (1810)										
(2)	(12) 1)	(30)	(29)	(28)	(27)											
同 楠甫村	同	同 合津村	同	同 阿村字釜	同 上島姫浦村											
同 上天草市	同	同 上天草市	同	同 上天草市	同 熊本県上天草市											
旧庄屋 年寄浅右衛門 儀右衛門 高木七郎左衛門	同	伝吉 本陣岡部弥十郎	同	武平治 本陣年寄治左衛門	本陣庄屋 本浦本十左衛門 十右衛門											
合津村字觀音平より字樋藏引迄測る。楠甫村高札前より字登屋迄測る。	雨天逗留	阿村小島崎より合津村字柿ノ木を歴て字觀音平迄測る。	ソウ島半周測る。	同所逗留測。瀬島、中島、水島、裸島一周測る。黒島、大	姫浦村阿村界より字釜を歴て字小島崎迄測る。	同所逗留測。姫浦村字本釜より姫浦村阿村界迄測る。										
一九六		一九六	一九六	一九六	一九六	二〇〇										

宿泊日・旧暦		【支隊】		(西暦)		宿泊地		現・市町村名		宿泊宅		天体観測		
4	3	2	11月1日	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	(1810)
(-30)	(-29)	(-28)	(-27)	上島楠甫村	大矢野島 中村枝柳浦	藏之千束島 庄之浦	上天草市	同	同	同	同	同	同	庄屋增田利三郎
同	合津村	同	今泉村	熊本県上天草市	同	同	同	同	同	同	同	同	同	雨強不止、楠浦村より直に大島子村へ
同	上天草市	同	上天草市	同	百姓黒右衛門	百姓彦兵衛	同	同	同	同	同	同	同	同所逗留測。志柿村字瀬戸より大島子島村迄測る。
向陽軒	同	庄屋岡部九郎左衛門	庄屋高木七左衛門	中村明神ヶ浦より字長砂連迄測る。洲先片側測る。八木島、小八木島、横島一周測る。	中村字長砂連より上村字江樋迄測る。	同所逗留測。藏之千束島一周測る。	同所逗留測。上村字七ツ割より登立村字瀬平崎迄測る。	同所逗留測。上村字七ツ割より登立村字瀬平崎迄測る。	同所逗留測。登立村字瀬平崎より字双原迄測る。	同所逗留測。登立村字双原より字新田迄測る。木島、篠九郎島一周測る。	同所逗留測。大浦村より字小畔迄測る。竹島、釘島一周測る。	同所逗留測。大浦村より赤崎村を歴て大浦村迄測る。黒島一周測る。	一九六	
横島、長浦島一周測る。	尾迄測る。	楠甫村字釜より字蛤を歴て教良木村字長淵迄測る。	高目島、樋合島一周測る。大浦村小畔より楠甫村字釜を歴て字伝島字下村迄測る。	庄屋岡部九郎左衛門	庄屋高木七左衛門	中村字長砂連より上村字江樋迄測る。	同所逗留測。藏之千束島一周測る。	同所逗留測。中村明神ヶ浦より字長砂連迄測る。洲先片側測る。八木島、小八木島、横島一周測る。	同所逗留測。登立村字瀬平崎より字双原迄測る。	同所逗留測。登立村字双原より字新田迄測る。木島、篠九郎島一周測る。	同所逗留測。大浦村より赤崎村を歴て大浦村迄測る。黒島一周測る。	同所逗留測。志柿村字瀬戸より大島子島村迄測る。	一九六	

宿泊日・旧暦		(西暦)		宿泊地		現・市町村名		宿泊宅		天体観測		大図番号																
16	*	15	*	14	*	13	*	12		11		10		9		8		11月7日	中食	上島 浦村字松尾	同 教良木村	同 上天草市	庄屋植村嘉左衛門	合津村字樋藏引より字折尾を歴て字打尾迄測る。	一九六			
【支隊】	( 12 )	【支隊】	( 11 )	中食	【支隊】	( 10 )	【支隊】	( 9 )	8	( 7 )	同	同	同	同	同	同	同	同	本陣庄屋福島丹治 百姓三太夫 庄屋後見勝太夫	頭百姓源太郎	楠甫村字登屋より教良木村字小路を歴て浦村字松尾迄測る。 浦村字松尾より字中浦迄測る。教良木村字小路をより字下 周測る。牧島字瀬ノ場より字長浜迄測る。 教良木を歴て姫浦村本陣前迄測る。	同 上天草市	同 天草市	同 上天草市	同 上天草市	同 天草市	同 天草市	二〇〇
八代城下	人吉城下	八代城下	人吉城下	一勝地坂屋村	八代城下	市野瀬村枝告村	八代城下	佐敷町	同	同	同	同	同	同	同	同	同	島、猿子島一周測る。牧島字瀬ノ場より字松ノ木迄測る。 島、竹ヶ島、ヨンカ島、クンセ島、葛籠島一周測る。 島字松ノ木より字長浜迄測る。恒星測定。	雨天逗留	同所逗留測。御所浦本村より字十段迄測る。赤島、眉島一 周測る。牧島字瀬ノ場より字長浜迄測る。	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	
同 八代市	同 人吉市	同 八代市	同 人吉市	同 八代市	同 八代市	芦北町	同 八代市	芦北町	同	同	同	同	同	同	同	同	島、瓢箪島一周測る。夜、本隊は佐敷町、支隊は八代へ乗 船。	同所逗留測。御所浦村字元浦より御所浦本村迄測る。黒 島、瓢箪島一周測る。夜、本隊は佐敷町、支隊は八代へ乗 船。	同所逗留測。御所浦村字元浦より御所浦本村迄測る。黒 島、瓢箪島一周測る。夜、本隊は佐敷町、支隊は八代へ乗 船。	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇		
一文字屋市左衛門	客館	一文字屋市左衛門	客館	大庄屋高橋孫四郎	本陣口屋番 四宮彦右衛門	一文字屋市左衛門	森田貞吉	同	同	同	同	同	同	同	同	同	島字松ノ木より字長浜迄測る。恒星測定。	同所逗留測。御所浦本村より字十段迄測る。赤島、眉島一 周測る。牧島字瀬ノ場より字長浜迄測る。	同所逗留測。御所浦本村より字十段迄測る。赤島、眉島一 周測る。牧島字瀬ノ場より字長浜迄測る。	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇		
大島、白島一周測る。	同所逗留。 午中太陽と恒星測定	終日雨、休。	無測量。 相良候より毛木綿の贈物あり受納。	苦竹洲一周を測る。	一勝地村枝告村熊本領界より球磨川端迄測る。	佐敷町枝桑原より市野瀬村枝告村人吉領界迄測る。相良候 より煎茶の贈物あり受納。	朝、 測定	八代城下へ着。	船。	朝、 佐敷町へ上る。佐敷向町測所より枝桑原迄測る。恒星 測定	船。	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	同所逗留測。御所浦村字元浦より御所浦本村迄測る。黒 島、瓢箪島一周測る。夜、本隊は佐敷町、支隊は八代へ乗 船。	同所逗留測。御所浦村字元浦より御所浦本村迄測る。黒 島、瓢箪島一周測る。夜、本隊は佐敷町、支隊は八代へ乗 船。	同所逗留測。御所浦村字元浦より御所浦本村迄測る。黒 島、瓢箪島一周測る。夜、本隊は佐敷町、支隊は八代へ乗 船。	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇		
一九五	二〇〇	一九五	二〇〇	一九五	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	同所逗留測。御所浦村字元浦より御所浦本村迄測る。黒 島、瓢箪島一周測る。夜、本隊は佐敷町、支隊は八代へ乗 船。	同所逗留測。御所浦村字元浦より御所浦本村迄測る。黒 島、瓢箪島一周測る。夜、本隊は佐敷町、支隊は八代へ乗 船。	同所逗留測。御所浦村字元浦より御所浦本村迄測る。黒 島、瓢箪島一周測る。夜、本隊は佐敷町、支隊は八代へ乗 船。	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇			

宿泊日・旧暦		(西暦)		宿泊地		現・市町村名		宿泊宅		天体観測		大図番号	
27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	*	(13)	球磨川乗船川路十三里
(23)	先手昼食	(22)	(21)	(20)	[支隊]	(19)	(18)	(17)	(16)	(15)	[支隊]	(14)	永野屋弥平衛門
川尻中町	中牟田村	宇土町新三丁目	同	網田村枝戸口浦	戸馳島 戸馳村	波多村	郡浦村	松橋村	鏡村枝鏡町	同	八代城下	八代市	本陣五木屋才平
同 熊本市南区	同 熊本市南区	同 宇土市	同	同 宇城市	同 宇城市	同 宇城市	熊本県宇城市	同 宇城市	同 八代市	同	八代市	八代市	永野屋弥平衛門
山本五太郎 薩摩屋喜兵衛	本陣山城屋藤藏	大庄屋内田利右衛門 町人沢田忠三郎	本陣桜間善十郎 士席格岡村茂三治	百姓金平 浜田吟藏	本陣庄屋島田源之助	嘉八	本陣庄屋岡村栄之丞	嘉八	本陣庄屋岡村栄之丞	本陣士席松枝金藏 地士永松奎右衛門	本陣西派 紀伊国屋貞助	地福山円光寺	本陣馬回格士分 緒方吉次
松山村字畠中より宇土町を歴て上新開村字三ツ枝迄測定	上新開村字三ツ枝より緑川を渡り緑印を残し堤を錢塘村字小満干を歴て中牟田村堤、舟藏脇迄測定。	長浜村字小松崎より大島山際を歴て上新開村字三ツ枝迄測定。中神島一周測定。戸馳村字内湯浦より右に字大崎鼻迄測定。	同所逗留測。赤瀬村字女石より枝戸口浦を歴て長浜村字小満干を歴て中牟田村堤、舟藏脇迄測定。	波多村字岩脇より波多村枝大田尾村を歴て赤瀬村字女石迄測定。中神島一周測定。戸馳村字内湯浦より右に字大崎鼻迄測定。	戸馳村字浜ノ洲より右に字内湯浦迄測定。	ノ脇迄測定。郡浦村字前越崎より波多村止宿下を歴て字岩戸馳村字浜ノ洲より左に字大崎鼻迄測定。	同所逗留測。郡浦村字前越崎より波多村止宿下を歴て字岩戸馳村字浜ノ洲より左に字大崎鼻迄測定。	大口村、手場村界字西崎より郡浦村を歴て字前越崎迄測定。曆局より急御用状届く。	松橋村測所より制札前迄測定。益城郡、伊土郡界より松合村字西を歴て大口村、手場村界字西崎迄測定。恒星測定。	鏡村、野津手永より江所村字南新田を歴て松橋村制札前迄測定。古閑村脇瀬より下有佐村枝内田村を歴て鏡村迄測定。産島凡測。恒星測定。	木星、小星凌犯推歩あり。刻限違不見。	本陣五木屋才平 永野屋弥平衛門	同所逗留測。一つ塩屋洲一周測定。麦島村徳印より前川渡を歴て徳淵村番所前迄測定。
一九五	一九五	一九五	一九五	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九五	一九五	一九五	一九五	一九五

										宿泊日・旧暦 (西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	天体観測	大図番号	
8	7	6	5 *			4	3	2	1	文化7年12月 (1810)	(12.26)	河内村舟津	熊本県熊本市西区	本陣西派 光明山尊照寺 医師高橋春益 高瀬屋清吉	同所逗留測。川尻中町より熊本城下市中入口迄測る。恒星測定。	28
(2)	(811.1.1)	(31)	【支隊】	(30)	中食	(29)	(28)	(27)	(12.26)	高瀬町	同	同	同	同	同	
滴水村植木宿	湯町	関村字関町	大島村	平山村	大島村	長洲村	同	同	同	本陣一向宗西派 碧海山運光寺 足軽格志水惣右衛門	本陣一向宗西派 碧海山運光寺 足軽格志水惣右衛門	河内村舟津より伊倉南方村字部田見を歴て浜村人家限迄測る。恒星測定。	南走湯村緑印より奥古閑村を歴て方近村過ぎ小島町迄測る。	29		
同 熊本市北区	同 山鹿市	同 南関町	同 荒尾市	同 荒尾市	同 荒尾市	長洲町	同	同	同	本陣木村甚三郎 独札格別當 第前屋長之充	本陣木村甚三郎 独札格別當 第前屋長之充	河内村舟津より伊倉南方村字部田見を歴て浜村人家限迄測る。恒星測定。	同所逗留測。浜村人家限より高瀬川を渡り中村字小浜迄測る。浜村より高瀬川に添て高瀬町迄測る。木星と小星の凌犯・恒星測定。	25		
亭主大庄屋西島源七 客館	亭主大庄屋金栗瀬助	本陣客館 正勝寺 役人段北原和右衛門	本陣一向宗西派 天福山光徳寺 地士中島勘十郎	馬回格黒田時太	馬回格黒田時太	馬場助左衛門	本陣客館 仮亭主斎藤和助 歩士小姓列	同	同	中村字小浜より下村字榎塘を歴て長洲村迄測る。恒星測定。	中村字小浜より下村字榎塘を歴て長洲村迄測る。恒星測定。	同	同	同		
湯町より菊池川を渡り、色出村字乙貝を歴て滴水村植木宿迄測る。恒星測定。	柳川領熊本領国界より字関町、大田黒村字六本松を歴て湯町、一名山鹿迄測る。恒星測定。	大島村より平山村字上平山を歴て字関町街道追分迄測る。	雨天不測量	無測似て着。恒星測定。	大島村より平山村字上平山を歴て字関町街道追分迄測る。	恒星測定。	一九三	一九三	一九三	一九三	一九三	一九三	一九三	一九五		

宿泊日・旧暦												(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	天体観測
21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	熊本城下 新一丁目浦小路	熊本市中央区	預り亭主分栗崎十介	滴水村植木宿より御馬下村字馬出を歴て熊本城下入口出町木戸際迄測る。恒星測定。
(15)	(14)	(13)	中食	(12)	中食	(11)	(10)	中食	(9)	(8)	(7)	(6)	同	同	同	同所逗留。恒星測定。細川候より贈物あり、預け置く。
同	同	岡城下 竹田寺町三丁目	轟木本村	久住村枝阿屋師	添津留村字三本松	坂梨村	宮地村	内牧村内内牧宿	大津村内大津町	大津町	大津町	同	同	同	同所逗留測。京一町目より宝町木戸入口迄測る。淨土宗九京町口木戸迄測る。清正公大明神祇へ参詣。日蓮宗発星山淨地院本妙寺立寄靈宝を一覧。	
同	同	竹田市	大分県竹田市	熊本県久住町	大分県竹田市	同	同	阿蘇市	同	大津町	大津町	同	同	同	品山蓮台寺へ行て桧垣姥の旧碑を見る。	
同	同	客館亭主分野原平助	庄屋勘右衛門	本陣客家坂亭主 口屋番唯右衛門 竹田町乙名役用聞 西八十左衛門 形師	本陣客館 亭主大庄屋江藤尉八 小庄屋岩下及助	阿蘇神社	本陣客館 大庄屋大塚安太 大庄屋手代武市	大庄屋甲斐半兵衛 直触原佐左衛門	大庄屋甲斐半兵衛 直触原佐左衛門	立田口より上立田村枝弓削字大久保を歴て大津村内大津町止宿前迄測る。暦局書状一封届く。	同	同	同	同	同所逗留。	
測る。	同所逗留測。下木村、平村界字赤坂より平村字小高野谷迄	轟木本村より米納村字紙漉迄測る。久住村より山路村字上	岡街道追分より轟木本村迄測る。	添津留村字三本松より岡街道追分を歴て久住村枝阿屋師止宿前迄測る。	小池野村、大利村界より添津留村字三本松迄測る。	同所逗留測。小池野村より小池野村、大利村界迄測る。	阿蘇神社前より坂梨村を歴て小池野村迄測る。恒星測定。	内牧宿止宿前より阿蘇神社華表前迄測る。	大津町止宿前より古城村、車坂村境を歴て内牧村内内牧宿止宿前迄測る。恒星測定。	一九三	一九三	一九三	一九三	一九三		

宿泊日・旧暦		(西暦)		宿泊地		現・市町村名		宿泊宅		天体観測		大図番号
30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	
( 24)	【支隊】	( 23)	【支隊】	( 22)	【支隊】	( 21)	( 20)	( 19)	【支隊】	大迫村	今市村	佐代村
府内城下桜町	下郡村	府内城下桜町	国家村	府内城下桜町	戸次市村	光吉村	犬飼村	野津原村字古町	大庄屋佐藤伝左衛門	大庄屋大久保右源太	堤村	同
同 大分市	同 大分市	同 大分市	同 大分市	同 大分市	同 大分市	同 大分市	同 大分市	同 大分市	同 大分市	同 大分市	同 豊後大野市	同
橋本屋八左衛門		橋本屋八左衛門		橋本屋八左衛門		本陣庄屋善左衛門	組頭利平治	熊本客館 預主林屋伝蔵	佐代村横枕	佐代村横枕	堤村より今市村を歴て熊本領原村界迄測る。	同
一同逗留、越年。		三ツ川村内鶴崎三佐街道追分より下郡村字六本木迄測る。		延岡領宮崎村より下郡村字六本松を歴て由布川を渡り府内 城下桜町迄測る。恒星測定。	戸次市村庄屋前より国家村迄測る。	岡領熊本領界より戸次市村庄屋帆足覚右衛門前迄測る。	野津原村字古町より光吉村を歴て延岡領宮崎村迄測る。恒 星測定。	熊本領原村界より野津原村字古町迄測る。恒星測定。	大迫村光林寺門前より犬飼村を歴て岡領熊本領界迄測る	佐代村横枕より大迫村光林寺門前迄測る。	平村字小高野谷より上野村字追分を歴て山路村字上四ツ口 迄測る。字追分より堤村迄測る。	同
一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八二

宿泊日・旧暦		文化8年1月		西暦		宿泊地		現・市町村名		宿泊宅		天体観測	
11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	(1811)	(1.25)	府内城下桜町
(4)	中食	(3)	(2)	(1)	(31)	(30)	立石町	垣道村字野原	別府村	同	(27)	(26)	同
高瀬村	樋田村	樋田村	福島村	宇佐村	橋津村	同	亀川村	別府市	別府市	同	同	同	大分県大分市
同 中津市	同 中津市	同 中津市	同 宇佐市	同 宇佐市	同	杵築市	杵築市	別府市	別府市	同	恒星測定。	橋本屋八左衛門	
万田村庄屋兼帯彦作	本陣庄屋三郎兵衛	本陣庄屋金三郎	本陣一向宗西派	本陣田丸山長久寺	寺中法行寺	吉用土佐守	本陣客館亭主分門松弾之丞	大庄屋橋津喜右衛門	庄屋松川完平	庄屋与惣兵衛	白木村追分より田浦村、浜脇村界を歴て別府村制札迄測る。恒星測定。	越年、一同逗留。久留島候より半切紙の贈物あり、受納。同所逗留。江戸表年首状を認む。暦局急御用状届く。恒星測定。	一八一
無測量。	樋田村止宿前より耆闘山羅漢寺門前迄測る。引帰すり、受納。	福島村止宿前より湯屋村を歴て日田街道を佐知村庄屋前を歴て樋田村止宿前迄測る。中津候より国産刻煙草の贈物あり。中津候より国産酒の贈物あり、受納。恒星測定。	宇佐八幡宮社前より中津領高村境を歴て福島村止宿前迄測る。中津候より国産酒の贈物あり、受納。恒星測定。	橋津村より宇佐八幡宮社前迄測る。神主より産物贈りあり、辞する。	平山村、西屋敷村境より橋津村迄測る。	屋敷村境迄測る。	本陣年寄胡麻鶴安之丞	庄屋小野儀兵衛	亀川村より小浦村、辻間村境迄測る。	小浦村、辻間村境より金越峠を歴て貢井村字貢井分迄測る。日出候より保多木綿等の贈物あり、受納。	別府村制札より亀川村迄測る。	前迄測る。府内候より真綿等の贈物あり、受納。由原八幡宮境内に大楠あり周十四間。暦局へ書状を出す。	一八一
一七九	一七九	一七九	一七九	一七九	一七九	一七九	一七九	一七九	一七九	一七九	(1.25)	府内城下桜町	大分県大分市



宿泊日・旧暦		(西暦)		宿泊地		現・市町村名		宿泊宅		天体観測		大図番号	
【支隊】		【本隊】		文化8年2月		(1811)		文化8年2月		(1811)		文化8年2月	
~ 25)	小休	~ 24)	(2. 23)	同	萩城下浜崎町	萩城下浜崎町							
同 萩市	同 萩市	同 萩市	山口県萩市	同	本陣御用定宿 山県百合藏 上野長兵衛	大黒屋六兵衛	上野長兵衛	本陣御用定宿 山県百合藏	同	烈風、逗留			
同所逗留測。石屋町海岸より浜崎川を渡り川島村字中津江を歴て河上川を渡り山田村枝倉江迄測る。東田町より浜崎本町止宿前を歴て迄測る。恒星測定					同所逗留測。萩市中境より大橋を渡り東田町を歴て松本橋を渡り宇松本迄測る。東田町より浜崎本町止宿前を歴て石橋を歴て浜崎屋町海岸迄測る。								
一七六	一七六	一七六	一七六	一七六	一七六	一七六	一七六	一七六	一七六	一七六	一七六	一七六	一七七

宿泊日・旧暦		(西暦)		宿泊地		現・市町村名		宿泊宅		天体観測	
12	11	10	9	8	7*	6*	5*	4*	(26)	佐々並村	本陣木村源太左衛門
(6)	後手中食	(5)	(4)	先手中食	後手中食	(3)	(2)	(支隊)	(支隊)	萩市	井本又右衛門
益田村	高津村	横田村	青原村	柳村	宿谷村	津和野城下森町	徳佐市	徳佐市	篠目村字痛堂本村	大井村枝黒川	百姓長左衛門
同 益田市	同 益田市	同 益田市	同 津和野町	同 津和野町	島根県津和野町	同 山口市	同 山口市	同 山口市	山口町道場門前町	福井市	岡吉左衛門
領主持、仮亭主 新左衛門	斎藤源十郎	潮清左衛門	領主持、仮亭主 庄屋安達長左衛門	兵助	本陣酒造家庄屋 弥重重蔵	本陣庄屋椿五左衛門 百姓伊藤伊藏	百姓喜代太郎	支隊、徳佐市本陣前より津和野市中高崎町を歴て森町 を過ぎ市中限、寺田村初迄測る。此日度々大雪。津和野候 より看、葛粉等被贈之、即受納。	篠目村字痛堂本村より山代街道追分字曾根を歴て朝早川を渡り徳佐市 前より大河内川を歴て生雲村持坂迄測る。	大井村枝黒川	本陣阿部四郎右衛門
後手、無測にて中島村内小高津へ立寄、熊野松の名木を一 覽す。先手、須子村より益田村制前を歴て上本郷村字染 場、權現拝殿前迄測る。恒星測定	横田村より高津村寅年止宿迄測る。須子村より高津村を渡り須子村を歴て高津人麻呂の社迄測 る。須子村より石川を渡り柳村を歴て青原本村上市、下市界止宿前迄測 る。恒星測定	忠敬外五名無測にて石川を乗船、直に横田村へ引て地図を 成す。青原村より石川を渡り三星村を歴て横田川を渡り横 田村迄測る。恒星測定	柳村より柳村迄測る。恒星測定	宿谷村より柳村迄測る。	篠目村字痛堂本村より大河内川を歴て生雲村持坂迄測る。 本陣前迄測る。	大井村枝黒川	大井村枝黒川	大井村枝黒川より福井市迄測る。	福井市	大井村枝黒川	字松本より大井村枝黒川迄測る。
後手、無測にて中島村内小高津へ立寄、熊野松の名木を一 覽す。先手、須子村より益田村制前を歴て上本郷村字染 場、權現拝殿前迄測る。恒星測定	横田村より高津村寅年止宿迄測る。須子村より高津村を渡り須子村を歴て高津人麻呂の社迄測 る。須子村より石川を渡り柳村を歴て青原本村上市、下市界止宿前迄測 る。恒星測定	忠敬外五名無測にて石川を乗船、直に横田村へ引て地図を 成す。青原村より石川を渡り三星村を歴て横田川を渡り横 田村迄測る。恒星測定	柳村より柳村迄測る。恒星測定	宿谷村より柳村迄測る。	篠目村字痛堂本村より大河内川を歴て生雲村持坂迄測る。 本陣前迄測る。	大井村枝黒川	大井村枝黒川	大井村枝黒川より福井市迄測る。	福井市	大井村枝黒川	無測量。明木駅小休、人馬繼替。恒星測定
後手、無測にて中島村内小高津へ立寄、熊野松の名木を一 覽す。先手、須子村より益田村制前を歴て上本郷村字染 場、權現拝殿前迄測る。恒星測定	横田村より高津村寅年止宿迄測る。須子村より高津村を渡り須子村を歴て高津人麻呂の社迄測 る。須子村より石川を渡り柳村を歴て青原本村上市、下市界止宿前迄測 る。恒星測定	忠敬外五名無測にて石川を乗船、直に横田村へ引て地図を 成す。青原村より石川を渡り三星村を歴て横田川を渡り横 田村迄測る。恒星測定	柳村より柳村迄測る。恒星測定	宿谷村より柳村迄測る。	篠目村字痛堂本村より大河内川を歴て生雲村持坂迄測る。 本陣前迄測る。	大井村枝黒川	大井村枝黒川	大井村枝黒川より福井市迄測る。	福井市	大井村枝黒川	無測量。夏木原小休、湯田町へ行き温泉一覧。恒星測定
後手、無測にて中島村内小高津へ立寄、熊野松の名木を一 覽す。先手、須子村より益田村制前を歴て上本郷村字染 場、權現拝殿前迄測る。恒星測定	横田村より高津村寅年止宿迄測る。須子村より高津村を渡り須子村を歴て高津人麻呂の社迄測 る。須子村より石川を渡り柳村を歴て青原本村上市、下市界止宿前迄測 る。恒星測定	忠敬外五名無測にて石川を乗船、直に横田村へ引て地図を 成す。青原村より石川を渡り三星村を歴て横田川を渡り横 田村迄測る。恒星測定	柳村より柳村迄測る。恒星測定	宿谷村より柳村迄測る。	篠目村字痛堂本村より大河内川を歴て生雲村持坂迄測る。 本陣前迄測る。	大井村枝黒川	大井村枝黒川	大井村枝黒川より福井市迄測る。	福井市	大井村枝黒川	無測量。夏木原小休、湯田町へ行き温泉一覧。恒星測定



宿泊日・旧暦 【支隊】		(西暦) 宿泊地		現市町村名	宿泊宅	天体観測	大図番号
2	閏2月1日	29	28	27	26	25	24
~ 25)	(3. 24)	(23)	(22)	(21)	(20)	(19)	(18)
三次五日市町本町	青河村字下青河	深瀬村	上申立村本町	十日市町	佐西村	上根村上根市	下町屋村
同 三次市	同 三次市	同 安芸高田市	同 安芸高田市	同 安芸高田市	同 安芸高田市	同 安芸高田市	同 安芸高田市
境屋三兵衛	本陣吉舎屋作右衛門	八幡宮神主	山県屋庄兵衛	酒造家安国屋	丸屋又兵衛	百姓次郎右衛門	百姓利左衛門
青河村字下青河	青河村字下青河	志和知村渡川端	上申立村本町	入江村	佐西村	組頭喜平治	一向宗西派
を渡り三次五日市町本町迄測る。	より三次十日市町制札を歴て吉田川坂土橋	志和知村渡川端より青河村字下青河迄測る。	より上申立村本町を歴て橋本町迄測る。	より入江市渡場	より江川板橋を渡り十日市村鯨田町稻田橋迄に	横川橋追分より大林村を歴て上根村上根市迄測る。	南原村境より下町屋村字横川三次街道追分迄測る。
一六三	一六三	一六三	一六三	一六三	一六三	一六六	一六七
2月17日						19	18
						20	21
						20	21
						14	13
						14	13
						11	12)
						佐野村	丸原村
						佐野村	今市村
						浜田市	浜田市
						庄屋佐々田栄三郎	庄屋中田嘉兵衛
						都川村字赤谷	庄屋大浅嘉右衛門
						市木村枝越木	百姓九郎兵衛
						市木本村	八郎右衛門
						大塚村	庄屋田中助五郎
						大朝村	庄屋作右衛門
						広島県北広島町	組頭浅右衛門
						北広島町	冷月山円立寺
						北広島町	庄屋清三郎
						北広島町	大庄屋立川元右衛門
						安佐北区	庄屋三戸官右衛門
						広島市	庄屋作右衛門
						安佐北区	桑原山西光寺
						広島市	一向宗西派
						安佐北区	桑原山西光寺
						同	同
						北広島町	北広島町
						北広島町	北広島町
						大朝村	大朝村
						庄屋佐々田栄三郎	庄屋佐々田栄三郎
						都川村字赤谷	都川村字赤谷
						佐野村	佐野村
						浜田市	浜田市
						丸原村	丸原村
						今市村	今市村
						浜田市	浜田市
						庄屋中田嘉兵衛	庄屋大浅嘉右衛門
						都川村字赤谷	百姓九郎兵衛
						市木本村	八郎右衛門
						大塚村	庄屋田中助五郎
						大朝村	庄屋作右衛門
						北広島町	組頭浅右衛門
						北広島町	冷月山円立寺
						北広島町	庄屋清三郎
						北広島町	大庄屋立川元右衛門
						北広島町	庄屋三戸官右衛門
						北広島町	庄屋作右衛門
						北広島町	桑原山西光寺
						北広島町	一向宗西派
						北広島町	桑原山西光寺
						北広島町	同
						北広島町	北広島町
						北広島町	北広島町
						大朝村	大朝村
						庄屋佐々田栄三郎	庄屋佐々田栄三郎
						都川村字赤谷	都川村字赤谷
						佐野村	佐野村
						浜田市	浜田市
						丸原村	丸原村
						今市村	今市村
						浜田市	浜田市
						庄屋中田嘉兵衛	庄屋大浅嘉右衛門
						都川村字赤谷	百姓九郎兵衛
						市木本村	八郎右衛門
						大塚村	庄屋田中助五郎
						大朝村	庄屋作右衛門
						北広島町	組頭浅右衛門
						北広島町	冷月山円立寺
						北広島町	庄屋清三郎
						北広島町	大庄屋立川元右衛門
						北広島町	庄屋三戸官右衛門
						北広島町	庄屋作右衛門
						北広島町	桑原山西光寺
						北広島町	一向宗西派
						北広島町	桑原山西光寺
						北広島町	同
						北広島町	北広島町
						北広島町	北広島町
						大朝村	大朝村
						庄屋佐々田栄三郎	庄屋佐々田栄三郎
						都川村字赤谷	都川村字赤谷
						佐野村	佐野村
						浜田市	浜田市
						丸原村	丸原村
						今市村	今市村
						浜田市	浜田市
						庄屋中田嘉兵衛	庄屋大浅嘉右衛門
						都川村字赤谷	百姓九郎兵衛
						市木本村	八郎右衛門
						大塚村	庄屋田中助五郎
						大朝村	庄屋作右衛門
						北広島町	組頭浅右衛門
						北広島町	冷月山円立寺
						北広島町	庄屋清三郎
						北広島町	大庄屋立川元右衛門
						北広島町	庄屋三戸官右衛門
						北広島町	庄屋作右衛門
						北広島町	桑原山西光寺
						北広島町	一向宗西派
						北広島町	桑原山西光寺
						北広島町	同
						北広島町	北広島町
						北広島町	北広島町
						大朝村	大朝村
						庄屋佐々田栄三郎	庄屋佐々田栄三郎
						都川村字赤谷	都川村字赤谷
						佐野村	佐野村
						浜田市	浜田市
						丸原村	丸原村
						今市村	今市村
						浜田市	浜田市
						庄屋中田嘉兵衛	庄屋大浅嘉右衛門
						都川村字赤谷	百姓九郎兵衛
						市木本村	八郎右衛門
						大塚村	庄屋田中助五郎
						大朝村	庄屋作右衛門
						北広島町	組頭浅右衛門
						北広島町	冷月山円立寺
						北広島町	庄屋清三郎
						北広島町	大庄屋立川元右衛門
						北広島町	庄屋三戸官右衛門
						北広島町	庄屋作右衛門
						北広島町	桑原山西光寺
						北広島町	一向宗西派
						北広島町	桑原山西光寺
						北広島町	同
						北広島町	北広島町
						北広島町	北広島町
						大朝村	大朝村
						庄屋佐々田栄三郎	庄屋佐々田栄三郎
						都川村字赤谷	都川村字赤谷
						佐野村	佐野村
						浜田市	浜田市
						丸原村	丸原村
						今市村	今市村
						浜田市	浜田市
						庄屋中田嘉兵衛	庄屋大浅嘉右衛門
						都川村字赤谷	百姓九郎兵衛
						市木本村	八郎右衛門
						大塚村	庄屋田中助五郎
						大朝村	庄屋作右衛門
						北広島町	組頭浅右衛門
						北広島町	冷月山円立寺
						北広島町	庄屋清三郎
						北広島町	大庄屋立川元右衛門
						北広島町	庄屋三戸官右衛門
						北広島町	庄屋作右衛門
						北広島町	桑原山西光寺
						北広島町	一向宗西派
						北広島町	桑原山西光寺
						北広島町	同
						北広島町	北広島町
						北広島町	北広島町
						大朝村	大朝村
						庄屋佐々田栄三郎	庄屋佐々田栄三郎
						都川村字赤谷	都川村字赤谷
						佐野村	佐野村
						浜田市	浜田市
						丸原村	丸原村
						今市村	今市村
						浜田市	浜田市
						庄屋中田嘉兵衛	庄屋大浅嘉右衛門
						都川村字赤谷	百姓九郎兵衛
						市木本村	八郎右衛門
						大塚村	庄屋田中助五郎
						大朝村	庄屋作右衛門
						北広島町	組頭浅右衛門
						北広島町	冷月山円立寺
						北広島町	庄屋清三郎
						北広島町	大庄屋立川元右衛門
						北広島町	庄屋三戸官右衛門
						北広島町	庄屋作右衛門
						北広島町	桑原山西光寺
						北広島町	一向宗西派
						北広島町	桑原山西光寺
						北広島町	同
						北広島町	北広島町
						北広島町	北広島町
						大朝村	大朝村
						庄屋佐々田栄三郎	庄屋佐々田栄三郎
						都川村字赤谷	都川村字赤谷
						佐野村	佐野村
						浜田市	浜田市
						丸原村	丸原村
						今市村	今市村
						浜田市	浜田市
						庄屋中田嘉兵衛	庄屋大浅嘉右衛門
						都川村字赤谷	百姓九郎兵衛
						市木本村	八郎右衛門
						大塚村	庄屋田中助五郎
						大朝村	庄屋作右衛門
						北広島町	組頭浅右衛門
						北広島町	冷月山円立寺
						北広島町	庄屋清三郎
						北広島町	大庄屋立川元右衛門
						北広島町	庄屋三戸官右衛門
						北広島町	庄屋作右衛門
						北広島町	桑原山西光寺
						北広島町	一向宗西派
						北広島町	桑原山西光寺
						北広島町	同
						北広島町	北広島町
						北広島町	北広島町
						大朝村	大朝村
						庄屋佐々田栄三郎	庄屋佐々田栄三郎
						都川村字赤谷	都川村字赤谷
						佐野村	佐野村
						浜田市	浜田市

		宿泊日・旧暦		(西暦)		宿泊地		現・市町村名		宿泊宅		天体観測		大図番号			
		【本隊】		(文化8年閏2月) (1811)													
		1 6	1 5 *	1 4	1 3	1 2	1 1 *	1 0	9 *	8 *	7 *	6 *	5 *	4 *	1 *	（3. 24）	
（ 8）	中休	（ 7）	昼夜 休	（ 6）	（ 5）	（ 4）	（ 3）	（ 2）	（ 1）	（ 31）	（ 30）	（ 29）	（ 28）	（ 27）	同	（1811）	
東城町	見登村本郷	東油木村油木市	安田村宇上河内谷	下井関村	百谷村	箱田村	万能倉村	土手村	府中市村上町	行騰村	上下町	鵜賀村	吉舎宿	同	广島県三次市	本陣百姓幸四郎 七九郎	
同	庄原市	同	神石高原町	同	神石高原町	同	福山市	同	福山市	同	府中市	同	三次市	同	吉舎屋幾左衛門 金屋政右衛門	赤名駅より横谷村枝室市を歴て字犀ヶ峠迄測る。恒星測定	
同	庄原市	同	神石高原町	同	神石高原町	同	福山市	同	福山市	同	府中市	同	三次市	同	庄屋清十郎 年寄清左衛門	横谷村字犀ヶ峠より上布野村布野駅迄測る。	
上梶屋重三郎	庄屋彦右衛門	庄屋七郎左衛門	年寄久治郎	大庄屋山手十郎平	庄屋園右衛門	庄屋伊右衛門	万能倉村	本陣浦上甚兵衛	百姓長右衛門	庄屋喜一郎	阿字屋秀平	本陣家光屋吉右衛門	庄屋要石衛門	同	庄屋清十郎 年寄清左衛門	本陣清兵衛	
大庄屋代郁左衛門								阿賀屋源右衛門								本陣吉舎屋作右衛門	
無測。	無測。	無測。	帝釈天岩窟あり一覧	く。	安田村より東油木村迄測る。恒星測定。	下井関村より安田村迄測る。	字一杯水より下井関村迄測る。恒星測定	下加茂村より百谷村を歴て字一杯水迄測る。	万能倉村字妻ノ神より下加茂村、箱田村を歴て下御領村国	分寺道碑に繋ぐ。止宿は箱田良助親の家。	新市村より神谷川を渡り土手村を歴て万能倉村字妻ノ神迄測る。	府中市村上町より新市村を歴て吉備津社へ打上。	村上町迄測る。恒星測定	測定	同	吉舎屋幾左衛門 金屋政右衛門	境屋三兵衛
一五六	一五六	一五六	一五六	一五六	一五六	一五六	一五七	一五七	一五七	一五七	一五七	一五七	一五六	一五六	一五六	一五六	

宿泊日・旧暦												(西暦)		宿泊地		現・市町村名		宿泊宅		天体観測		大図番号																					
15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	閏2月5日	(3.28)	【支隊】 庄原村街道	下村字尾引	百姓六藏 惣兵衛	三次十日市町制札より字鳥居ヶ瀬庄原村街道追分を歴て原川を渡り下村字尾引迄測る。	東城町本町制札前より有栖川大橋を渡り畠木村を歴て矢田村字馬場迄測る。	17*	(9)	畠木村	岡山県新見市	大庄屋杉三郎右衛門	一五六																				
(7)	(6)	中食	(5)	(4)	中食	(3)	(2)	中食	(1)	(4)	東城新町	宇山村枝為平 見登村字三本松 新免村枝藤谷	小川村本村 字後迫	正原村正原町	滑屋三左衛門 佐敷屋広右衛門	下村字尾引より正原町制札迄測る。	下神代村字三延より武坂峠を歴て下神代村字三延迄測る。	18*	(10)	下神代村字三延	同	新見市	本陣庄屋鹿右衛門	一五六																			
下原村	地頭村	大竹村	高山村	高山市村	東三原村	中平村	東油木村	新免村枝藤谷	東城新町	同	庄原市	庄原市	庄原市	庄原市	庄屋道明多藏 大庄屋柚木源左衛門	正原町制札より見登村字三本松迄測る。	矢田村字馬場より苦坂峠を歴て西方村迄測る。	19*	(11)	新見町本町	同	新見市	庄屋幸左衛門	一五〇																			
同	高梁市	同	高梁市	同	高梁市	岡山県高梁市	同	神石高原町	同	庄原市	庄原市	庄原市	庄原市	庄屋徳治郎	本陣庄屋彦右衛門 伏見屋広右衛門	西北方より町浦川江堂橋を渡り新見町入口を歴て本町止宿迄測る。恒星測定	下神代村字三延より苦坂峠を歴て西方村迄測る。	20*	(12)	上熊谷村字土井	同	新見市	本陣庄屋	一五〇																			
同	高梁市	同	高梁市	同	高梁市	岡山県高梁市	同	神石高原町	同	庄原市	庄原市	庄原市	庄原市	庄屋徳治郎	本陣庄屋彦右衛門 伏見屋広右衛門	新見町入口より熊谷川小川橋を渡り上熊谷村字土井止宿迄測る。恒星測定	西北方より町浦川江堂橋を渡り新見町入口を歴て本町止宿迄測る。恒星測定	21*	(13)	庄原市	同	庄原市	百姓六藏 惣兵衛	一六三																			
町年寄	大島三郎右衛門	庄屋忠左衛門	穴門山赤浜宮 神主松岡甲斐守 真言古義 大光山淨明寺	原中明家	庄屋庄平	高山市村	高山市村	中平村	東油木村	三郎兵衛 惠比須屋七郎左衛門 庄屋孫兵衛	川西村古城字五本松 新免村枝藤谷	宇山村枝為平 見登村字三本松 下梶屋莊七郎 庄屋孫兵衛	制札迄測る。 宇山村枝為平より川西村古城字五本松より新免村枝藤谷迄測る。 見登村字三本松迄測る。 下梶屋莊七郎 庄屋孫兵衛	正原町制札より見登村字三本松迄測る。 宇山村枝為平より川西村古城字五本松を歴て東城新町本町 見登村字三本松より田川瀬川を渡り東油木村迄測る。	下村字尾引より正原町制札迄測る。 正原町制札より見登村字三本松迄測る。 下梶屋莊七郎 庄屋孫兵衛	正原町制札より見登村字三本松迄測る。 宇山村枝為平より川西村古城字五本松を歴て東城新町本町 見登村字三本松より田川瀬川を渡り東油木村迄測る。	156	156	156	156	156	156	156	156	156	156	156	156	156	156	156	156	156										
地頭村	より河部川を渡り下原村本町制札迄測る。	大竹村	より地頭村迄測る。	高山市村	より赤浜宮穴門山一ノ門前迄測る。東三原村より	中平村	より東三原村迄測る。	東油木村	より中平村迄測る。	新免村枝藤谷	より田川瀬川を渡り東油木村迄測る。	宇山村枝為平	より川西村古城字五本松迄測る。	見登村字三本松	より田川瀬川を渡り東油木村迄測る。	下梶屋莊七郎	より川西村古城字五本松迄測る。	庄屋孫兵衛	より田川瀬川を渡り東油木村迄測る。	庄屋徳治郎	より川西村古城字五本松迄測る。	正原町制札	より見登村字三本松迄測る。	百姓六藏 惣兵衛	より川西村古城字五本松迄測る。	156	156	156	156	156	156	156	156	156	156	156	156	156	156	156	156	156	156

宿泊日・旧暦		(西暦)		宿泊地		現・市町村名		宿泊宅		天体観測		大図番号			
27	26	25	24	23	22	【支隊】	20	19	18	17	16	15	14		
(~19)	(18)	中食	(17)	(16)	(~15)	小休	(~14)	(13)	(~12)	中食	布瀬村字上布瀬	上砦部村	庄屋作兵衛	下原村本町制札より河部川を渡り福地村枝境谷迄測る。	
上足守町	井尻野村枝湛	郷谷	宍粟村	美袋村	同	松山城下本町	飯部村字高谷	新見町本町	同	新見市	高梁市	高梁市	正田屋彦右衛門	福地村枝境谷より河部川を渡り松山西村字段を歴て松山城下大手前迄測る。	
同岡山市北区	同	同	総社市	同	同	高梁市	同	同	同	新見市	新見市	新見市	百姓市郎兵衛	八川村より片岡村枝塙坪、湯原道久世追分を歴て八川村迄測る。	
本陣鳥羽平五兵衛	新蔵重八	本陣源六	百姓伊介	山正満寺	長百姓和右衛門	大坂屋平松与七郎	藤井鎮石衛門	本陣庄屋	同	大坂屋平松与七郎	大坂屋平松与七郎	大坂屋平松与七郎	伏見屋広右衛門	松山城下大手前より今津村枝地久を歴て八川村迄測る。	
上足守町迄測る。恒星測定	井尻野村枝湛	井尻野村枝湛	宍粟村	美袋村	同	松山東村字段	松山東村字段	上熊谷村字土井止宿より田治部村枝今井を歴て小坂部村追	同	松山東村字段	松山東村字段	松山東村字段	庄屋太左衛門	下中津井村より湯原道追分を歴て上砦部村、阿口村境迄測る。	
						舟にて松山城下着	舟にて松山城下着	分迄測る。	同	舟にて松山城下着	舟にて松山城下着	舟にて松山城下着	本隊飯部村字高谷より高橋川を渡り今津村枝地久へ繋。川	本町止宿前より石蟹村、町浦川を渡り長谷村迄測る。	
						雨天逗留。恒星測定。江戸状を出す。	雨天逗留。恒星測定。江戸状を出す。		同	雨天逗留。恒星測定。江戸状を出す。	雨天逗留。恒星測定。江戸状を出す。	雨天逗留。恒星測定。江戸状を出す。	本隊同所再宿	長谷村より飯倉村迄測る。それより乗船松山城下着	
						美袋村より宍粟村迄測る。	美袋村より宍粟村迄測る。		同	美袋村より宍粟村迄測る。	美袋村より宍粟村迄測る。	美袋村より宍粟村迄測る。	飯倉村より竜王峠を歴て飯部村字高谷迄測る。	飯倉村より竜王峠を歴て飯部村字高谷迄測る。	
						宍粟村より湛渡口郷滻追分を歴て横谷村界迄測る。それより無測。	宍粟村より湛渡口郷滻追分を歴て横谷村界迄測る。それより無測。		同	宍粟村より湛渡口郷滻追分を歴て横谷村界迄測る。それより無測。	宍粟村より湛渡口郷滻追分を歴て横谷村界迄測る。それより無測。	宍粟村より湛渡口郷滻追分を歴て横谷村界迄測る。それより無測。	宍粟村より湛渡口郷滻追分を歴て横谷村界迄測る。それより無測。	宍粟村より湛渡口郷滻追分を歴て横谷村界迄測る。それより無測。	
						渡口郷滻追分より横谷川を渡り井尻野村枝湛迄測る。外に井山宝福寺迄測る。此寺は雪舟出所。	渡口郷滻追分より横谷川を渡り井尻野村枝湛迄測る。外に井山宝福寺迄測る。此寺は雪舟出所。		同	渡口郷滻追分より横谷川を渡り井尻野村枝湛迄測る。外に井山宝福寺迄測る。此寺は雪舟出所。	渡口郷滻追分より横谷川を渡り井尻野村枝湛迄測る。外に井山宝福寺迄測る。此寺は雪舟出所。	渡口郷滻追分より横谷川を渡り井尻野村枝湛迄測る。外に井山宝福寺迄測る。此寺は雪舟出所。	渡口郷滻追分より横谷川を渡り井尻野村枝湛迄測る。外に井山宝福寺迄測る。此寺は雪舟出所。	渡口郷滻追分より横谷川を渡り井尻野村枝湛迄測る。外に井山宝福寺迄測る。此寺は雪舟出所。	渡口郷滻追分より横谷川を渡り井尻野村枝湛迄測る。外に井山宝福寺迄測る。此寺は雪舟出所。
						上足守町迄測る。恒星測定	上足守町迄測る。恒星測定	上足守町迄測る。恒星測定	同	上足守町迄測る。恒星測定	上足守町迄測る。恒星測定	上足守町迄測る。恒星測定	上足守町迄測る。恒星測定	上足守町迄測る。恒星測定	上足守町迄測る。恒星測定

宿泊日・旧暦		(西暦)		宿泊地		現・市町村名		宿泊宅		天体観測		大図番号				
6	*	5	*	4	3	2	1	文化8年3月	(1811)	30	29	28	(20)			
【支隊】	支隊中食	【支隊】	支隊中食	(27)	(26)	(25)	(24)	中食	有年駅	渦上駅	岡山城下下ノ町	北方村	益田村	金川村		
三木上町	小野町	社村	国包村	吉広村	繁昌村	坂本村	東坂本村	兵庫県赤穂市	同	同	岡山市北区	岡山市北区	岡山市北区	岡山市北区		
同	同	同	同	兵庫県加古川市	同	同	同	本陣柳原与惣左衛門	恒星測定	無測	無測	無測	無測	組頭弥平治		
三木市	小野市	加東市	加古川市	加西市	加西市	姫路市	姫路市	中屋文右衛門	道中黒田肥前守に行遇	無測	無測	無測	無測	本陣河内屋喜代太		
形屋五郎兵衛	寺西清左衛門	隅屋弥兵衛	本陣福田屋喜左衛門	庄屋清之丞	庄屋佐助	百姓清石衛門	井上庄兵衛	大門屋弥左衛門	東坂本村より天台宗書写山円教寺本堂前迄測る。東坂本村より広嶺山境内を通り天台宗増井山隋願寺本堂を歴て東中島村出石街道追分および西中島村法花山追分に印を残し姫路城下大黒町街道測残印繋測。	見付屋源兵衛	恒星測定	無測	無測	無測	無測	備中国、備前国界より菅村作州道追分を歴て金川村迄測る。恒星測定
る。寺脇追分より東這田村法界寺門前を歴て三木上町迄測	国包村より太郎太夫村字寺脇追分を歴て小野町陣屋前迄測る。	繁昌村より社村佐保神社迄測る。	吉広村より国包村迄測る。	坂本村より繁昌村迄測る。	坂本村より細工所村淨土宗安樂寺を歴て吉広村迄測	坂本村より繁昌村迄測る。恒星測定	坂本村より繁昌村迄測る。恒星測定	百姓宇平	百姓利平	百姓清石衛門	百姓清石衛門	百姓定之助	百姓平右衛門	百姓吉次郎		
一三六	一三六	一三六	一三六	一三六	一三六	一四	一四	一四	一四	一四五	一四五	一四五	一四五	一四五		

## 浮世絵で読み解く 伊能測量隊が見た藤澤宿の今昔

神奈川県藤沢市

写真・構成 狼 芳明

大沼 晃

平成二十八年七月上旬、藤澤市辻堂に市が運営する文化施設「藤澤浮世絵館」が開館した。版画愛好家の小生は、開館記念特別イベントの「学芸員によるミニ講座」を受講。あらかじめ予備知識を得たあと鑑賞中はつとする版画に出逢った。その作品は、歌川広重の「東海道五十三次之内藤澤」で四ツ谷追分を描いたものである。(下部の絵参照。制作年一八四七(五二))

藤澤宿の代表的な名所、旧跡は三つあり、①時宗総本山遊行寺②遊行寺橋とそのたもとに建つ江の島の一ノ鳥居③東海道から大山へ向かう大山道の入り口にある四ツ谷の立場(宿と宿の間の休憩地)で、よく目ににする保永堂版は①と②が一体的に描かれたものであり、四ツ谷を描いたものを見るのは初めてで、見ていて内心に絵が私に何か訴えかけている気配を強く感じた。



図1 「東海道五十三次之内藤澤」歌川広重 (浮世絵館蔵)

ると左下隅に四ツ谷不動が描かれており、延宝四年(一六七六)に江戸横山町の講中が建てたものなので、伊能測量隊の一行は描かれた光景に似た町並みを見ているのではないかと感じた次第である。

そこで、藤澤市生涯学習部郷土歴史課の細井守氏にこの浮世絵を読み解いてもらつたところ、次のような事柄が分つた。画面中央(江戸方面、すなわち東)の山際が朝焼けを表す朱色のぼかしで表現されており、

空が藍色のぼかし摺り技法なので空気がよく澄む冬場の早朝の光景ではなかろうか。筆者の見解も同じく小説の文言の中に「東の空にようやく赤みが差し始めたころ……」という常套句があり、曉六時ごろと思える。また、左右の茶店の軒に吊るされた色とりどりの沢山の幡は、大山講の一団への目印であり、ここに立ち寄り接待を受けたそうだ。一部に浮世絵独特の誇張があるものの、江戸の庶民は早寝早起きであったから、画中の人々も早立ちの旅人たちだろうし、左の女性の歩く向きが皆と逆で、田村方面から来たと読み取れる。

因みに四ツ谷追分は、遊行寺橋から旧東海道を西に進むこと約三キロのところに現存している。ただし、藤澤バイパス開通に伴う道路の拡幅工事などに伴い移転。昔の面影が変貌したが四ツ谷不動や大山一の鳥居は地元の人々により現在も大切に保存されている。(図2参照)

堂外の道標が元来のもので、万治四年（一六

堂内の道標の上部には大山不動が座し、正面に「大山道」、両側面に「これより大山みち」と彫られている。不動尊は浮世絵では立像のようであり、その違いは風化が激しいため一部手直しされてきたようだ。



図2 藤沢市明治市民センター発行「めいじ歴史散策まっふ」より



## 写真2

六一）に江戸浅草藏前講中によつて建てられ、天保年間に再建されたとの記録がある。その道標が関東大震災で倒滅したため平成十七年七月一日に再建、大山阿夫利神社目黒仁宮司（会報七十九号に投稿の「大山探訪顛末記」に「登場いただいた目黒久仁彥禰宜の父上」）を招き護摩供養を行つた。以後、七月一日道開きには、四谷町内会で年中行事として護摩供養が継続されているとのこと。

また、写真2右奥の鳥居は、道標と同じく再建を繰り返してきた歴史があり、関東大震災後の昭和三十四年五月に復元。石柱に大山阿夫利

大山探訪以来、目黒禪宜と時々電話連絡をしながら情報交換をしてきたが、今回の浮世絵観賞や地元の歴史調査を通して伊能忠敬を介して何か不思議なご縁で結ばれていく気がしていふ。



## 写真 1 四ツ谷不動尊

神社目黒潔宮司（目黒久仁彦禪宜の曾祖父）の名前が彫られていることを見つけた。（写真2）  
参考）

## 記念碑

藤沢バイパス道新設  
事ノタメ四ツ谷不動尊移  
転トナリコレガ敷地  
藤沢市辻堂字鎌塚一番地  
鈴木得郎氏ノゴ好意ニ依  
奉納サレタ依ツテコレヲ  
記念シ永遠に傳ヘンガ為  
此の碑エヲ建立シマシタ  
昭和三十八年二月三日  
四ツ谷町内会一同

## 原田屋惣太郎の他行先推測

戸村 茂昭

はじめに

世界遺産に登録されている「石見銀山（大森銀山とも呼称）」で採掘された銀や銀鉱石を日本海及び瀬戸内海側の港に運びだした道は石見銀山街道と呼ばれている。日本海へは温泉津の沖泊に向う「温泉津沖泊道」があり、瀬戸内海へは尾道に向かう「尾道道」と、途中の宇賀（現在の広島県三次市甲奴町宇賀）で分岐して笠岡に向かう「笠岡道」が造られたと言われている。これら銀山街道の主要な部分は伊能測量隊も残らず測量している。即ち、「温泉津沖泊道」については第八次測量の文化十年十一月二十一日に永井、門谷、保木、甚七からなる支隊が測量し、「尾道道」については第七次測量の文化八年二月十七日に浜田城下から大手分けした本隊が測量している。やはり、銀という重要な産物を運ぶ道であるから幕府としてきちんと把握しておくために測量することにしたのである。

その銀山街道の測量における文化八年二月二十七日、伊能測量隊本隊は銀山街道尾道道の浜原村に宿泊して天測した。（測って得た緯度は三十五度四分半であった）。

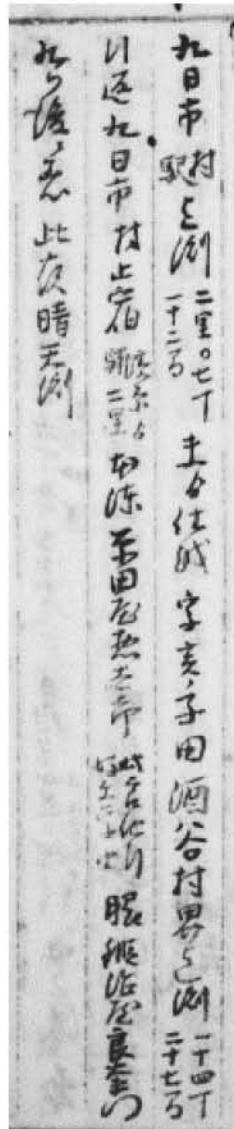


図1 測量日記  
(文化 8.2.28)

表面的には味も素つ気もない表現の日記のようであるが、読みようによつては「？」となるような表現があることに気付く。それは「此節他行」という表現である。

幕府役人でもある伊能忠敬が幕府御用でこの地に測量に来ることは少なくとも半年以上も前に触れられているから本陣の原田屋惣太郎は当然そのことを知つてゐる筈であり、その当日には測量や宿泊の準備のため村人を采配する必要があるから絶対に留守には出来ない筈である。それにも拘わらず留守（此節他行）にしていたということである。二十八巻もある測量日記の中にこのような表現は当然なことながら此処だけであった。

伊能測量におけるこの異常な事態に目をつけた地元の郷土史家（岩谷知宏さん）が地元の横穴遺

量日記の末尾の部分を図1に示す。解説すれば次の通りとなる。

「九日市村（駅）迄測（二里七町十二間）。それより仕越、字亥ノ子田、酒谷村界迄測（十四町二十七間）。引返、九日市村止宿（浜原より駅二里）。本陣原田屋惣太郎（此節他行、好文学由）。脇鍛治屋良右衛門。九ツ後に着。此夜晴天測。」

跡を舞台とした怪談仕立てのお話として他行の内容を完成させ、十五夜の夜にお寺で朗説会を開催したので、そのお話を紹介することにする。

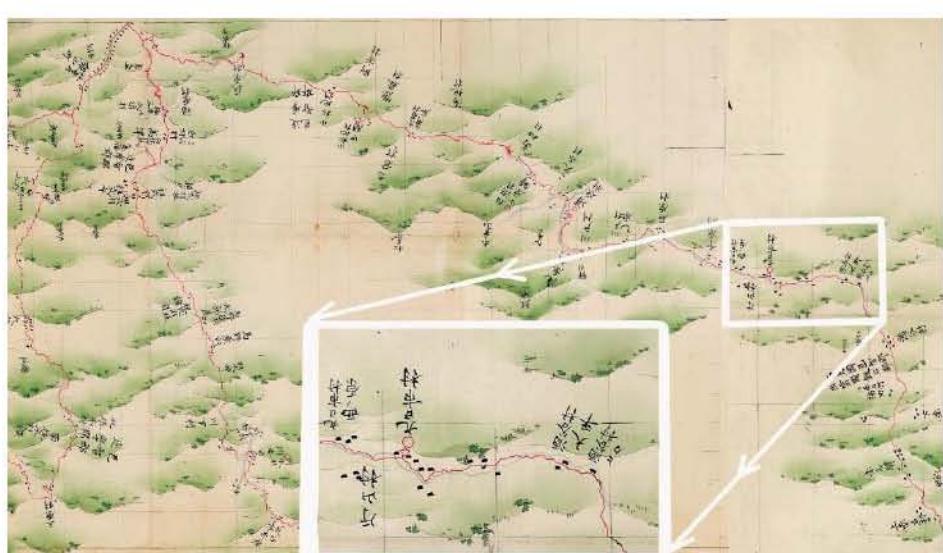


図2 石見銀山からの銀山街道九日市駅への伊能図（伊能図大全より）

お話「黄泉國への招待」

「ふうむ・・・

何度も書物を読み返しては思案している老人がある。

時は文化八年二月二十七日の深夜丑三つ時。

老人の名は原田屋惣太郎、またの名を佐和華谷といふ。邑智郡沢谷村九日市駅本陣の主を長年務めている。書や多くの学問に親しみ、数多くの書も残している。

先日、自宅裏の神社に、不思議なことを書いている書物を見つめたのだった。表紙には、「於保地郡風土記」とある。博学で知られる華谷であるが、初めてお目にかかった書物である。

問題は、その内容であった。

邑智郡各村々の歴史、文化、産物や植物等が記されている。地元沢谷村のことでもちろん記述されており問題のところは次のように書かれていた。

この書物、偽書か否か。

横穴は九日市から北西の方角に位置する。古来、北西の方角には黄泉国があるとされ、横穴は黄泉国へ通ずる。「黄泉平坂」かもしだれない。

華谷（即ち、原田屋惣太郎）の胸は騒いでいた。

元来、不可思議なものに飛びつかずにはいられない性格である。

「行ってみるしかないナ。」

華谷は眩いた。傍らにいた三毛猫が、膝にうずくまつた。

「沢谷村熊見に大小百余の横穴あり。是黄泉国に入り口也。黄泉国は根之国也。横穴より内へ入りたる者、戻りたる者なし。故、暗見といい、後に熊見と称す・・・」

熊見は、沢谷川下流、浜原村久西に隣接する集落である。確かに熊見には横穴群があり、その由来を知る者はいなかつた。

次の朝、即ち文化八年二月二十八日、華谷は残雪残る銀山街道を下流へと歩を進めた。冬も終わり、道端に躋の蔓などが顔を覗かせて春の兆しがちらほらしていた。道は川を渡り、丘を越えて浜原村久西に至る。

横穴はその丘の中腹にあつた。

横穴郡は雪で所々埋もれていたが、いくつかの穴は朝日に照らされてくつきりと口を開けている。華谷は横穴に近づいて行つた。老体に似合わず軽い足取りである。

穴の一つを覗きこんでみる。

中は暗く、奥の方は何も見えない。

しかし、華谷は気づいていた。

風だ。

穴奥からの風が華谷の頬を撫ぜていた。この穴はどこかにつながつてゐる。

モゾリ



図3 美郷町熊見 横穴遺跡

蠢くような音。華谷は、ゴクリと音を立てて唾を飲み込んだ。脇の下に汗がつたう。恐怖より好奇心のほうがはるかに優つていて。穴の奥へ足を踏み入れる。奥のほうで声がする。甘い香り。

「おやじどの、」

突然のひそやかな声に驚き、目を見張つた。その後、華谷は気を失つた。

一人の若者が、心配そうに顔を覗き込んでいる。息子の九華であった。見回すと、横穴の前で自分が倒れていることを自覚した。

「で、その声の主を見ることはできなかつたと。」

本陣の燈明の明かりの中、華谷はある老人と対面して座つていた。鼻筋の通つた顔。齡は六十過ぎか。しかし、体は頑健そのものようであった。

「左様。情けない限りでござります。」

「しかし、それは、夢幻の類では？」

「どんでもない！」

華谷はきつぱりと否定した。

「私は確かにあのひそやかな声を聞いたのです。声の主はこう申しておりました。」

『我、常世へ還りたし。』

故、還らむと欲ふを、且く黄泉神と相論はむ』

『われ、とこよへかえりたし。』

ゆえに、かえらんとおもふを、しばらく

よもつかみとあげつらわむ』

と女の声で。思うに伊耶那美の魂かと。』

老人は頷いた。

華谷と話す老人、名を伊能三郎衛門。またの名

を伊能忠敬とも、あるいは伊能勘解由ともいう。

日本全国を測量し、大日本沿海輿地全図の作成に命を掛けている人物。

忠敬の記した測量日記にはその日のことは次のように記されている。

「原田屋惣太郎（此節他行、好文学由）」。

俳句とか狂歌が好きな忠敬であるが故に文学を好んでいると評判の華谷こと原田屋惣太郎に会えることを楽しみにしていたのに会えなかつた心残りがこのような表現になつたのであると地元では伝えていた。

しかし、忠敬は原田屋惣太郎と実際のところは対面を果たしていたのであり、その対面でこのよくな奇妙な話を聞いていたのであつたが、幕府への報告書を兼ねた公文書でもある測量日記なので、「原田屋惣太郎（此節他行、好文学由）」とのみ書きしるし、この奇怪な話については書き残すことを遠慮したのではある。（お話 了）

おわりに

このお話を同じように、測量日記には時々前後に脈絡のある説明がない謎の多い表現があり、そこに着目してお話を膨らませている例が外にもある。それは測量日記第三巻の冒頭の「閏四月十九日 朝五ツ前深川出立。上下六人、伊能勘解由 門倉隼太、平山宗平、伊能秀藏、下人佐原吉助、新に召かかえ候長助なり。」の部分である。この長助だけは、出自も身分も曖昧なのである。この点に着目した井上ひさしは「四千万歩の男」という小説の中でこの長助の出自を小説家ら

しく（？）想像を膨らませることによって、あの膨大な小説に上げてしまつてゐるのである。

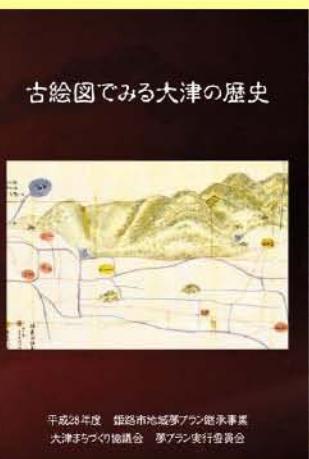
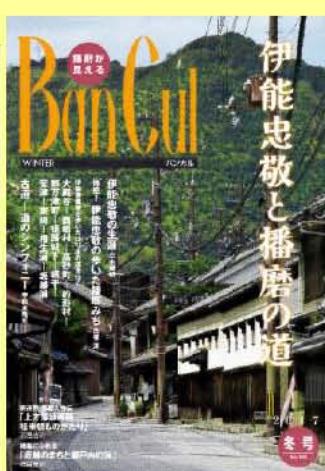
長助が小説の中に出てくるのは、蝦夷への出立日の千住である。長助は下総国検見川の百姓の出立が忠敬らの蝦夷への旅に際し用心棒が必要だろうと忠敬の長男の景敬の発案で一緒に蝦夷への供に推薦され千住から同行することになつたとされている（小説の一三六ページ）。ところが、以降この長助は白河藩主である松平定信の刺客との疑いを持たれた状態で筋書きが膨らみながら進み、三厩から船出するところで小説の第一巻（三九〇ページ）が終わる。測量日記（原文）ではこの間僅かに八ページに過ぎないのに、長助に対する井上ひさしの解釈によつて、小説は二五四ページにも膨らんでいるのである。一方、測量日記（原文）は、その間淡淡とした記述に終止し、忠敬一行が箱館に到着したのが五月二十二日。ところが翌二十三日、二十四日は何の理由も明記されておらずに単に逗留とだけ記され、翌二十五日になつて突然、「此朝召し連候長助、病氣を申し立て暇を願う候に付き御役所へ相伺長暇を差遣し三厩へ乗合船有之候よしに付、船賃合力の上に路用金壱分用達遣候」ということで長助は一行から離脱しているのである。

一方の小説では、函館で忠敬一行が隠密の疑いを役所からかけられ、ここに至つてようやく忠敬は隠密騒動を仕掛けた犯人が長助であることを六十ページかけて知るという筋書きにして測量隊から外しているのである。誠にもつて、小説家という人種は嘘八百を平氣で述べる輩のようである。

## 播磨地方に関する冊子出版

神戸新聞社が発行している冊子、BanCul（バンカル・播州カルチャ）2017冬号で「伊能忠敬と播磨の道」という特集が組まれ、当研究会の三木敏明さんが「伊能忠敬の生涯」というタイトルで、伊能忠敬の解説や播磨地方の測量を紹介しています。この記事の中には、前号で紹介のあつた伊能図の下絵図も紹介されており、担当スタッフによる伊能測量隊が訪れた箇所の現地レポートも掲載されています。

これとは別に、前号で紹介のあつた伊能測量関係の図等について解説された「絵図にみる大津の歴史」が姫路市の夢プラン実行委員会から出版されました。



播磨地方の伊能測量について紹介のあった冊子  
古絵図で見る大津の歴史（左）と Ban Cul の表紙（右）

# 新潟県村上市の案内板・石碑

山浦 佐智代

## 村上市

新潟県の最北に位置する村上市。その先は山形県である。北東部は、朝日連峰の稜線が山形県と新潟県とに分かれている。これらの山のおかげで、林業が盛んである。西側は日本海に面していて景勝地「笛川流れ」や「瀬波温泉街」などが観光客を呼び寄せていている。その温泉街から南に行くと、岩船港がある。江戸時代、ここは漁港としてだけでなく、北前船などの寄港地となり、商港としても賑わいを見せていた。当時、上岩船と下岩船に分けられて、それぞれに年寄（庄屋）が置かれていた。これから紹介させていただく伴田家は上岩船の年寄（庄屋）を務められていた。（下岩船は藤井庄右衛門家）なお、特産物は「鮭の塩引き」「北限の茶所の茶」。伝統工芸品の村上堆朱などである。

(1)

(ウキペディア、村上市ホームページ。ページ等)

①名称 案内板「伊能忠敬宿泊記念」  
②説明文

伊能忠敬の測量地點に植えられた松  
寿きの星を南の空清く  
雲吹きはらへ 秋の小夜風 伯寛

伊能忠敬（一七四五～一八一八）は江戸時代後期



伊能忠敬滞在の案内板



伴田家表門脇の板塀に設置された案内板

(1)

①名称 案内板「伊能忠敬宿泊記念」  
②説明文

伊能忠敬の測量地點に植えられた松  
寿きの星を南の空清く  
雲吹きはらへ 秋の小夜風 伯寛

伊能忠敬（一七四五～一八一八）は江戸時代後期

の地理学者・測量家で、幕府の許可を得て一八〇〇（寛政十二）から一八一六（文化十三）年まで十六年をかけ、日本全国の測量をなしとげられました。伊能忠敬の測量は、一八〇二（享和二）年奥羽越海辺測量の際に九月二十一から二十二日、岩船町の年寄役を務める伴田与惣左衛門家に滞在され、測量に当たられました。深夜まで続けられた天文測量は、ここに植えられている松の下で行われました。これらの岩船町滞在中の応対の様子や、その前後の行程などは、当時の伴田家当主である与惣左衛門（伯寛）による覚書に詳しく記されています。なお、当時の松は老木と

なったため一九九一（平成三）年に現在の松に植え替えられました。

平成二十六年十一月二日 伴田攻 識

③設置場所 新潟県村上市岩船上町2丁目 伴田家表門脇の板塀

④設置年月日 平成二十六年十一月二日

⑤設置者 伴田攻・美智子夫妻

⑥設置の背景・経緯 伊能忠敬測量日記に「家作よし」と記されている伴田家。今も江戸時代の風情が現存しておる、伴田夫妻が住まわれている。そして、折に触れ、座敷を解放して郷土史研究家や大学教授等による「伊能忠敬と岩船」を取り上げた講演会や、覚書を基に、測量隊に提供した料理を現し試食する会等を開くなど、岩船の歴史を風化させない活動をされて来られた。そんな中「地域活性化」とか「町おこし」という機運が岩船にも沸き起つてきた。伴田家に「案内板があれば良い」と提案したのは、周りの商店主の方々等であつたという。九月二十一日の夜、伊能忠敬は天測を行おうとしていた。はじめは雲が覆つて



石碑左面



石碑右面



石碑正面

いてきて、天測できたのだった。この時、当主与惣左衛門は「風が雲を吹き払つて欲しい」と願つた歌（案内板に掲載された歌）を詠んでいたのだ。なお、岩船地区区長会、岩船まちづくり協議会等の協力も得て、子供たちにも読めるように、漢字に振り仮名を付けた案内板を掲げた。

（伯寛は与惣左衛門の号）

⑦見学の可否  
随时可能

（2）

①名称 石碑 「伊能忠敬休憩の地」

②碑文

- 正面「伊能忠敬之碑」
- 右面「享和二年九月二十一日大日本沿海輿地全図作製に係る測量の為当地を訪れ此山形屋近蔵宅で休息」
- 左面「平成二十五年十一月吉日 横山講次建立」

にも、瀬波町にお出でになるのではないかと思われますのでお知らせします。なお、追々、お知らせしましょう。このことを塩谷や桃崎浜へもお知らせください。

九月十八日 年寄 常助 近蔵  
岩船町年寄 与惣左衛門 様

⑦見学随时可能

③設置場所 新潟県村上市瀬波中町三  
横山家敷地角

④設置年月日 平成二十五年十一月二十八日

⑤設置者 横山講次

⑥設置の背景・経緯

趣味として、地元の歴史を掘り下げて調査をされてきた横山氏。定年退職に際し「何か記念になるものを残したい。」そして「それが地域に役立つものを・・・」と願つて建てたのが「伊能忠敬之碑」である。この碑の近くには、かつて年寄（庄屋）近蔵宅があり、第三次伊能忠敬測量隊は九月二十一日に、休息していた。この三日前、近蔵は、もう一人の年寄の常助と連名で伴田家に報告・連絡書を送っている。以下に掲載するのは現代文にした内容である。

忠敬一行の前泊の様子を知りたく、海府の馬下村まで参りましたところ、昨日も府屋にお泊りなられた由、馬下村庄屋が府屋町より帰つて参りましたので、実否を問い合わせて帰つて来ました。従つて二十日ころ



## 石川県支部ニュース

## 加賀藩測量の足跡をたどる（六）

寺口 学

伊能忠敬らによる加賀藩測量の足跡をたどる現地探訪。今回は、石川



能登島大図（全国巡回フロア展 in 金沢工業大学）

史料としては『測量日記』（以下『日記』）があり、地元側の史料とともに能登島での測量をたどつてみたい。

この足跡を平成二十七年七月二十六日

この足跡を平成二十七年七月二十二日に松波村（鳳珠郡能登町）で再会。同二十五日に

甲村（鳳珠郡穴水町）から渡海し、能登島祖母ヶ浦村（七尾市）より再び二隊に分かれて三日間で測量した。

この測量に関する史料としては『測量日記』には、島へ渡海する前夜二十四日は大雨で、六ツ頃に止んだものの、「大曇天」で「微雨」の状態だったと記している。一行は、翌二十五日六ツ半頃に甲村を出発し、舟で「能州嶋」（能登島）へ向かった。

島の北東にある祖母ヶ浦港に上陸した一行は、平山郡藏隊（三名）と忠敬隊（五名）に手分け。忠敬隊は島の東側へ向かった。

五ツ後に祖母ヶ浦を出発し、昼は鯨目村淨尊寺で休息したあと、同村領内で立山・石動山・庵村いかけ山の位置を確認（『覚書』）。さらに同村内の嶽之宮（嶽神社）・竹生嶋について尋ねたあと測量に入り（同書、野崎村の「一向宗東派正願寺」に止宿している。正願寺は現在野崎集落の南方端にあるが、嘉永二年（一八四九）までは集落中心部北寄りの地にあったとされており、忠敬が泊まったのは移転以前の寺だったようである。さて、『日記』ではこの日の天気について「午後より段々天気になる」

したと思われる場所を船上から観察した。参加者は河崎・室山・相良・徳田・寺口に、能登島に関わりの深い大星氏（二十八年入会）が参加した。

## ①野崎村・正願寺（7/25）

「日記」には、島へ渡海する前夜二十四日は大雨で、六ツ頃に止んだものの、「大曇天」で「微雨」の状態だったと記している。一行は、翌二十五日六ツ半頃に甲村を出発し、舟で「能州嶋」（能登島）へ向かった。



忠敬隊昼食 瓢目村・淨尊寺

祖母ヶ浦漁港

と記し、夜は曇晴であったことから曇間に見える星を観測しており、寺の周辺で行つたのだろう。

②須曾村・新左衛門（7／26）  
二十六日は、朝の天気は「中晴」  
で、山々は雲に覆われていたことか  
ら見えない状態の中六ツ後に野崎村



忠敬隊② 須曾村・新左衛門宅（藤岡家）



忠敬隊① 野崎村・正願寺

を出発（「日記」）。途中、佐々波村領  
内で立山・石動山などの位置を確認  
するとともに、対岸の鵜浦村鹿渡島  
観音（七尾市）について尋ね、昼は  
平山隊（七尾市）について尋ね、昼は



平山隊② 久木村・太兵衛宅（中村家）



平山隊① 曲村・専徳寺

（7／25）  
佐波村惣七方で休息している（「覚  
書」）。八ツ後に須曾村へ到着。当地  
の肝煎である新左衛門宅（藤岡家・  
屋号「シンジヤミ」）に宿泊し、家の



闇の観音堂

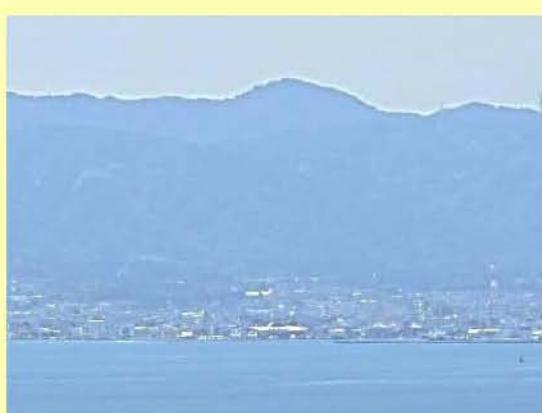


能登島ガラス美術館

①曲村・専徳寺（7／25）  
二十五日は、平山隊は祖母ヶ浦村  
より西側へ向けて測量を始め、同村  
領内で武連村二子山・甲村丸山（共

③合流して所口町へ（7／27）  
二十七日は、朝の天気は前日と同じ「中晴」で、六ツ頃に須曾村を出立し、五ツ頃に半ノ浦村で西の手分け隊と落ち合い、当地の肝煎である左門三郎（「覚書」では右衛門三郎）宅で昼食をとっている（「日記」）。なお、須曾村領内では、屏風崎（村領内）・和倉村弁天嶋（輪島市）の位置を確認している。

前で夜は天測を実施している。



須曾蝦夷穴古墳から七尾市方面の風景  
(中心右寄りの高い山が石動山)

（2）久木村・太兵衛（7/26）  
二十六日は、曲村を出立後、向田  
島内における観光地が集中している  
場所でもある。



伊能図と現地形の対比（筆者作成）

村飛地の「まき崎」（牧崎）から立山・石動山・二子山・御預所別所村嶽山を確認し、闔（ねや）村の権右衛門を確認し、「覚書」では皆善寺で休息、久木村の太兵衛方に止宿している（『日記』、「覚書」）。現在では周辺にのどじま水族館、能登島ガラス美術館があり、島内における観光地が集中している場所でもある。



観察地点との対比（全国巡回フロア展 in 金沢工業大学）

（3）合流して所口町へ  
二十七日は、半ノ浦まで測量し、半ノ浦村で忠敬隊と落ち合っている。なお、合流前の通村について『日記』には、「この辺は、岡（対岸の陸地）の長浦村（七尾市中島町）に近い。三町ほど」の猿しま（島）がある（意訳）と記している。猿島は、長浦と通の間の三ヶ口の瀬戸に位置する島で、すぐ北側には中能登農道橋が架かる。また、「覚書」によれば、通村の長者ヶ端（長者ヶ鼻）から屏風崎・瀬戸嵐村かねか嶋（種ヶ島）・別所村嶽山等を確認している。

落ち合った一行は、乗船して所口町（七尾市）に向い、順風だったこともあり四つ後に到着。こうして、三日間におよぶ能登島測量を終えたのである。

### 三、舟での測量を体感

（1）海上からの測量地点観察  
「覚書」には、「島の海沿いは通行が難しい場所が多いので、船を双方

点在しており、測量の合間にそうした風景を見ていたかもしない。

#### ③合流して所口町へ

二十七日は、半ノ浦まで測量し、半ノ浦村で忠敬隊と落ち合っている。なお、

合流前の通村について『日

記』には、「この辺は、岡（対

岸の陸地）の長浦村（七尾

市中島町）に近い。三町ほど

の猿しま（島）がある

（意訳）と記している。

猿島は、長浦と通の間の三

ヶ口の瀬戸に位置する島

で、すぐ北側には中能登農

道橋が架かる。また、「覚書」

によれば、通村の長者ヶ端

（長者ヶ鼻）から屏風崎・

瀬戸嵐村かねか嶋（種ヶ島）・

別所村嶽山等を確認して

いることから、入口の両端を結ぶ

間繩を渡し、他の舟が途中を補助し

ながら梵天までの方位と距離を測

たと考へられる。伊能図を見ると、

入り江の入口に真っ直ぐ線が引かれ

たと考へられる。伊能図を見ると、

さて、海上観察実施の当日は大星氏の知人である川向氏に船を出していただき、佐波漁港から海上へ出た。天気は青空が広がる快晴だったが、風があつたためか多少のうねりがあり、こうしたうねりに耐えながら、忠敬らは測量にあたつたのである。東側に海上を進むと間もなく3つの小島が見え、伊能図に記載がある「トウシマ」（現在はカラス島）「寺島」「コシキ島」であると思われる。さらに進むと「免屋入江」と称され奥に進むと二股に分かれている深い入り江が見えてくる。この入口部分西

の北側つまり能登島側は後世に埋め立てられたとみられる地形であるため、測量隊が訪れた当時は完全な島だった可能性がある。そうしたことから、長嶋は島影のみが描かれたのかもしれない。その後、さらに東へ海上を進み、崖に二つの大きな穴がぽつかり空いている二穴町、その東隣の日出ヶ島町近辺まで進んで引き返すこととなつた。

今回の海上観察は、測量隊が実際についたであろう風景をたどるにすぎなかつたが、これに測量という作業が加われば相当の苦労が強いられた

おわりに

今回は、四六回あまりの能登島を一日かけて一周し、三日間の測量隊の動きを追つた。従来からの宿泊地を訪ねるばかりではなく、新たな協力者を得て海上から測量地点を観察するという新しい取組も実施できた。石川県内における測量隊の足跡をたどる旅は残り少なくなっているが、海上観察のような新しい視点も取り入れながら今後も活動していきたい。

おわりに

能の測量隊だったからこそできることなのかもしれない。

を積んできた伊

河崎倫代「第四次測量隊、中能登を行く(三)――「真館覚書」より」

渡辺一郎「再現！海上引綱測量・唐丹で実演ロケ」(『伊能忠敬研究』五三、二〇〇八年)

能登島町史専門委員会『能登島町史通史編』(能登島町、一九八五年)伊能忠敬『測量日記第一巻 蝦夷地』(本州東海岸羽越尾張及越前以東(大空社、一九九八年)

参考文献



蝦夷穴歴史センター展示の木造船



## 出港した佐波漁港



「トウシマ」(現在はカラス島)  
「毒島」「コシキ島」



## 長島 (中心部分)



### 海上観察参加メーリー

## 会員便り

伊能忠敬の八幡墨坂神社測量  
—児童の学習と記念碑設置について—

嶋田 秀樹

### 一 はじめに

伊能忠敬は、第八次測量（九州・種子島方面）の帰路で、京都・飛騨・高山・木曽より入り、善光寺参詣の後、中仙道を経て江戸に帰還する際に信州須坂を測量しています。すなわち、測量日記・第二十六巻に、谷街道（飯山・中野・須坂・松代）を通り一八一四年の六月二十・二十一日（文化十一年五月三・四日）に、春木町・横町・八幡村・幸高・井上等の記述を残しています。

伊能忠敬研究

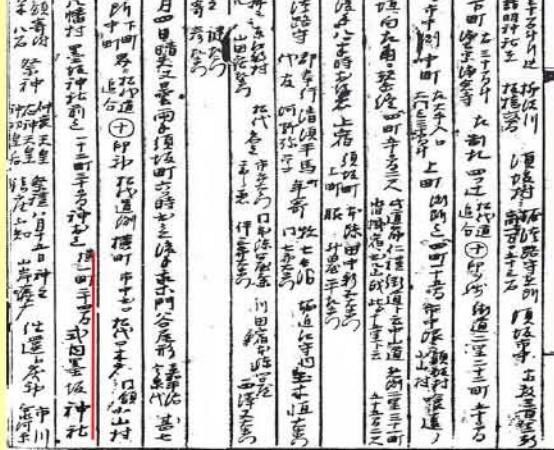


図1 測量日記

### 二 測量と小学校との関係

筆者は和算の研究から、伊能忠敬が須坂を測量したことは以前より知っていました。例えば平成十六年十月開催の「アメリカ伊能大図里帰り展」（名古屋ドーム）を見学しており、また『須坂史誌』第六章の関連記事を確認していました。

特に、筆者が在職した須坂市立森上小学校に隣接する八幡墨坂神社について、「…小山村枝八幡村、墨坂神社前迄一十二町三十〇間神前迄、横一町二十四間、式内墨坂神社…」と具体的な地名と数値を記しています。

以下は、この事実を児童の学習に活かせないだろうか、模索し、研究・実践した活動内容です。



図2 伊能図

しかし、本格的に調査・研究を始めたのは森上小学校に教頭として赴任した平成二十五年度からでした。翌年に学校創立八十周年記念を控え、学校沿革史や記念誌、航空写真等を整理する過程から、学校近辺の街道を一部開墾して旧校舎が建てられた事を知ったためでした。すなわち、小学校敷地下にあつた街道を伊能忠敬が歩き、測量した姿を想像して口を抱いたからです。

十九歳の年で最後の遠征であったこと、現校舎では図3の経路①を直線的に通したこと、地理や測量に必要な情報を提供した地域の支援者がいたことなどです。

### 三 児童の学習と取組

それ以来、伊能忠敬の人物像、測量の歴史的・科学的意味等を調べるとともに、「現校舎のどの位置に道があつたか?」「神社まで何メートルあ



図3 街道航空写真

平成二十七年度卒業の六年敬組（二十五名）は「総合的な学習」の時間に『身近な歴史に学ぶ』をテーマに、学校の昔や戦争当時の生活等について地域の皆さんからお話を聴くなどして、学習を深めてきました。そして、担任の桜井直子先生が「伊能忠敬の須坂測量」を児童に紹介し

るか?」を中心テーマに、学校保管資料や市誌編纂室、あるいは地域の方々との見聞から、幾つかの結論を得てきました。

たとえば、須坂の測量は忠敬が六十六年五月、伊能忠敬研究会員の市川美津夫氏（福島町）が来校され、伊能忠敬の測量と森上小学校との関わり等について貴重な資料を提示しながら説明いただきました。また、同年十一月の市教委主催・第三回歴史文化講座（市中央公民館）にて伊能忠敬研究会代表・渡辺一郎氏の講演をお聞きし、「伊能忠敬の須坂測量」を地域教材として児童の学習に役立てるための準備を開始しました。

て下さりこの年の十月より様々な追究をしてくれました。



写真2 歩幅の測定



写真1 桜井先生と児童



写真3 講演会の開催

活用して算数の学習を深める。

(五)古地図の解析から古水路や旧石段を再発見して整備する。

(六)墨坂神社内の額絵や紋章の被描者や揮毫者を追究する。

(七)地域の方々の支援を受けて学習成果を表示板等にして残す。

これらを通して子どもたちは、伊能忠敬の歩測の正確さや老いて止まぬ情熱、地域に眠る財産を研究する楽しさ、地域を支える方々への感謝など多くを学びました。また仲間とふるさとに愛着をもつて卒業していくことを嬉しく感じました。

それにしても筆者の思いを聞き入れながら粘り強く指導された桜井先生には感謝するばかりです。

(一)地誌や資料等を解説して墨坂神社に至る道を実際に歩く。

(二)詳しい事実等を知るために地元の研究家を招き講演を開く。

(三)墨坂神社参道を歩測して一五・一七mの位置を定める。

(四)実測した歩数や歩測のデータを



図4 谷街道の整備

筆者は天野義孝校長の了解を得ながら、児童や担任への資料提示や提案、助言をして活動を見守っていたのですが、市文化財立て看板の設置(一枚)、記念碑の製作や施工については地域の力強い支援や協力が必要でした。子どもらの草案文やアイディアはありましたが、地域の皆さんの意向なくしては実現しえない内容でした。

四 地域の支援と連携

また、伊能忠敬や「伊能図」とシートルト事件との関係」等、折りに触れて話題にしてくださった春日雅章先生始め、同僚にもお礼を述べます。

(三)南部地域作り推進委員長・関野友憲氏には市街づくり課への認可申請を支援していただいた。

(四)墨坂神社氏子総代の皆さんには記念碑の製作と設置を予算立ての上、賛同いただいた。

(五)高橋石材・高橋昭一氏には参道の切削、モルタル工法等の専門技

(一) 墨坂神社の位置に差異を発見の際、八幡区長・村石幸男氏より『八幡町沿革史』等の提供を得て、解決を図った。

写真5 墓坂神社看板



#### 写真4 学校敷地看板



### 墨坂神社看板



写真6 記念碑の施工

## 算数授業への活用

各人の歩幅で1527cm)を進む歩数を求め、伊能忠敬の測量値との差を出します。

- (1) 自分の歩幅で10歩進み、その長さの平均値をから、個人の歩幅aを求める。
  - (2) その値で1527(cm)を歩く場合の歩数を、 $1527 \div a = b(cm)$ で計算して出す。
  - (3) 実際に「歩幅aで、b歩進んで距離C(cm)」と測り、1527(cm)との差を求める。
  - (4) その差を、長さと度数の度数分布、ヒストグラムに表し、平均値を計算する。

6年智組23名(欠席2名)では、墨坂神社で実際に体験してみましたが、

平均は、歩幅65.7cm、歩数234歩で、その平均の距離差は約133(cm)でした。  
伊能忠敬のように、平均の歩幅で一定に歩くことの大変が分かりました。

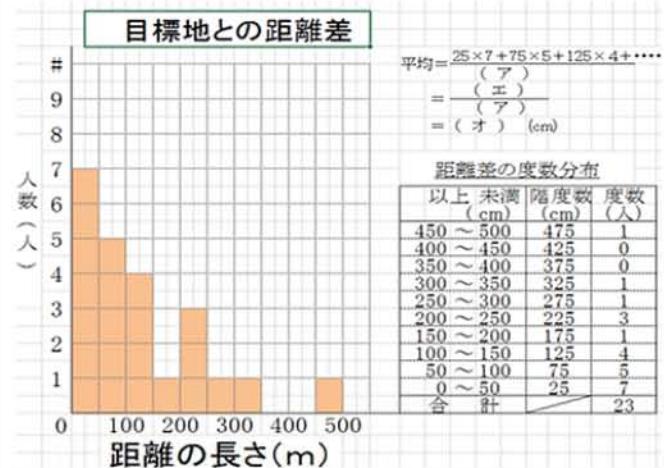


図5 算数授業のまとめ

(六)この他、市誌編纂室の委員・青木広安氏、伝統の技を伝える会・樋口正幸氏ら多くの皆さんから地域の伝承文化や昔話、貴重な助言等をお聞きして、参考にさせていただきました。厚く御礼申しあげます。

伊弉諾神は、日本初の全国地図を作成するために各地を測量しましたが、文化十一年五月四日にこの豊坂神社を通り、次の記録を残しました。  
「一・横一町二十四間、式内豊坂神社、祭神……、祭日……、住往江屋切」  
すなわち、神社の位置を道より「一・横一・七メートル」と測定し、元敷地たといふのです。  
森上小学校の児童たちは、実際に歩いて測り、その位置に目印を描きました。  
歩掛するときに、自分の歩幅と歩数を使い、その位置を確かめてみましょう。

図6 旧章による看板文案

明治初期・八幡町古図（墨坂神社所有）

16.01.14 嶋田発見

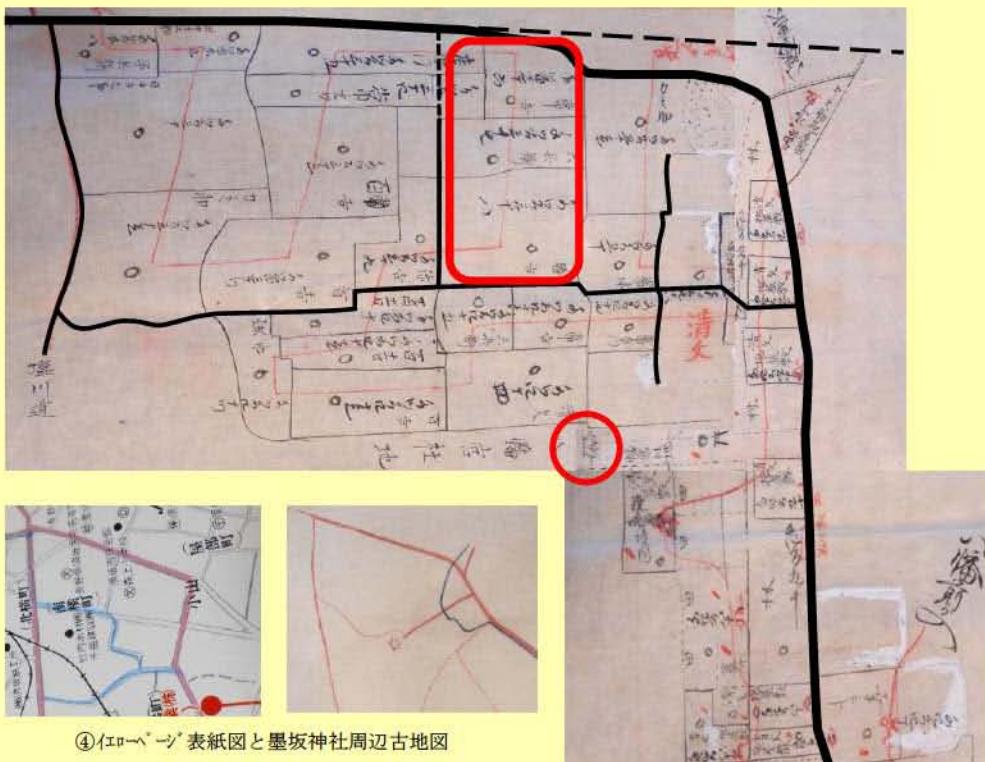


図7 新発見の古絵図

五 研究発表会の開催

『須坂測量の記念碑』は、伊能忠敬の偉業と事実を後世に残し、また地域の文化遺産にしようとする地域の皆さんのが願いが形になつたものです。しかし、その完成は六年敬組児童の小学校卒業後でした。そこで、山岸・墨坂神社宮司や氏子総代の皆さんとの協議から、7月末の神事の風祭りと大祓いの日に、戦後復興七周年記念事業として記念碑披露と奉納祈願を行うこと、また、関係する皆さんを招き、伊能忠敬と墨坂神社とのかかわりや児童と学校の活躍、研究成果を地域に発信するために発表会を開催することになりました。

次頁の図8は、その開催案内です。当日は桜井先生と旧六智の児童、市川美津夫氏、関野友憲氏ほか、氏子総代の皆さんや地域役員、一般住民も参加くださいり、スライドショーによる解説や説明を行い、無事終了しました。途中、児童代表の感想で小林陸君

は「昔の川や古道を見つけ、興味深く、大変楽しかった」、川本健太君は「伊能測量隊が地域を通り、測量にずれがなかつたことに驚き、その業績に感心した」と語ってくれました。また、桜井先生は「学習会や看板設置ができたのも地域の方の協力があつたからこそです。子どもたちは楽しんで学ぶことができました」と謝辞を述べました。

一方、参加者から「芝宮神社との関係はどうか」や「伊能忠敬についての墨坂神社の位置づけはどうか」等の質問もあり、充実したものになりました。

なお、地元の須坂新聞・第三二九四号（八月二十日）の表紙面に大きく報道され、地域の話題になつたことは大変嬉しいことでした。



墨坂神社に奉納する。  
 (二)今回の研究や研究発表の過程や成果を「研究額」に記述して八幡  
 墓坂神社に奉納する。

今後の活動としては、以下を考えています。

六 終わりに

今回の「伊能忠敬の須坂測量に関する研究」を振り返ると、全体構造は図9となるでしょう。

すなわち、「児童の主体的学習を支援する学校と地域と行政の円滑な連携」と「肯定的な個の存在と実践性」及び「感謝の心」の大切さです。そこには運命的な出会いと人間関係が存在し、各自の専門性や情熱こそがその達成の推進力であったと感じています。

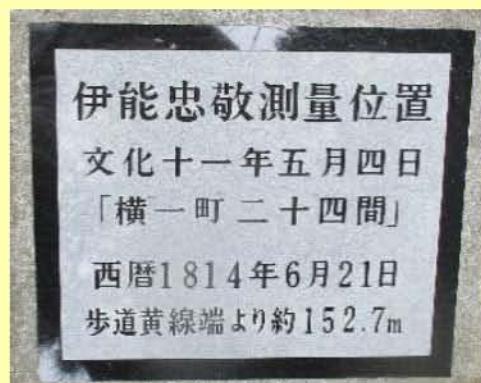


写真8 記念碑の刻印文

寺参詣の後に、なぜ谷街道を回つて江戸に帰還したか、その理由や背景を追究する。

地域の皆様へ

平成28年7月4日

八幡墨坂神社宮司 山岸 孝爾  
氏子総代会長 堀内 孝雄

## 伊能忠敬の墨坂神社測量に関する研究発表について(ご案内)

八幡墨坂神社では、恒例の風祭りと大祓えの神事を

7月30日(土)・31日(日)に実施いたします。

さらに、今年度は戦後復興70周年記念行事として、

標記の発表を下記のように開催する運びとなりました。

ご多用の折りとは存じますが、豊作祈願や厄払い、

さらに地域の文化振興のため、ご家族や近隣の方々を

お説いの上、参加くださいますよう、よろしくお願ひ

申し上げます。



記

1 日 時 平成28年7月31日(日) 9:00~10:00

2 場 所 墓坂八幡墨坂神社 社務所内

3 目 的

○ 伊能忠敬の測量と八幡墨坂神社との関わりについて、地域の方々に知っていただけます。  
○ 伊能忠敬の業績を示す表示板、記念碑の披露を通して、関係者に感謝の意を伝える。

4 主な内容

(1) 開会の言葉 氏子総代会  
(2) 主催者挨拶 八幡墨坂神社宮司 山岸 孝爾  
(3) 研究発表 森上小学校・前教頭 嶋田 秀樹

〔仮演題〕『伊能忠敬による八幡墨坂神社測量について』

・研究経過及びその成果、まとめのスライドショー  
・本研究をご支援、ご協力いただいた方々のご紹介  
・H27年度森上小学校6年智組代表児童の感謝発表 等

(4) 質疑応答 参加者による意見交換等

(5) 閉会の言葉 氏子総代会

5 連絡、その他

・表示板は、すでに鳥居前に設置済みです。また、伊能忠敬の測量記念碑については、神社内に設置する実物を見学いただく予定です。機会があればご覧ください。

6 伊能忠敬と八幡墨坂神社について  
伊能忠敬(1745~1818)は、日本で初めて正確な全国地図を作製した有名な人です。

69才の年に第8次測量を行い、1814年6月に、当時の八幡墨坂神社を測量してその経過を日記や絵図に残しています。

その資料や調査から子ども達と学校、地域と行政が連携、協力しながら、伊能忠敬の功績を示す表示板と記念碑の設置に努力してきました。



日本初の全国地図

図8 発表会の案内



写真9 宮司による披露祈願

最後に、本研究冊子への記事の掲載を提案して下さった市川美津夫氏、ならびに親切丁寧に連絡対応していただいた研究会事務局・菱山剛秀氏に深くお礼を申し上げて、今回の執筆を閉じます。

誠にありがとうございました。  
 (2019.2.1 完)

この他、様々な課題やアイディアがありますが、まずは長野県の伊能ウォーキング活動に協力しながら地道に伊能忠敬の研究を進めていく所存です。

(五)測量器具の製作、歩測や地球の午子線の長さを求める等、体験的な研修会を開催したい。

(四)旧6年智組の児童が残した紋章や額絵の疑問点をさらに後輩の子どもらと追究したい。



写真10 拝殿前で記念撮影

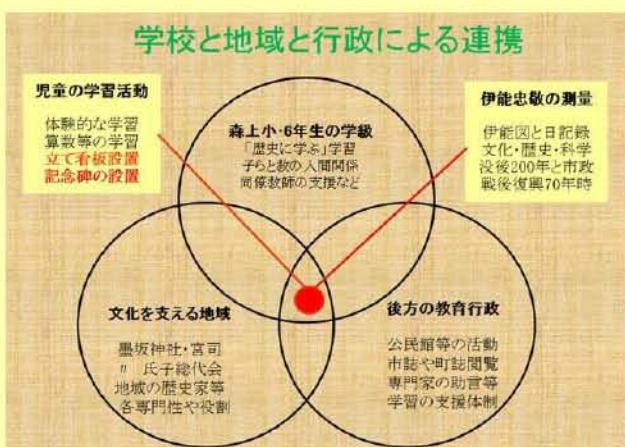


図9 研究の全体構想

## 平成の伊能忠敬・沿海歩行日記

戸村 茂昭

八月三日 朝六時後水見町出立。

此日曇天。塙村・柳田村・島村・太田村・国分村・伏木村(能川湊なり)、六渡寺村(道の右に三ヶ村あり)、海へ二丁斗)、放生津町、八ツ頭に着。止宿山王町、柴屋彦兵衛。此夜曇天、雲中に小測。(此町に八幡宮あり)。十村大庄屋高島庄右衛門見舞に出。

右記は伊能忠敬測量日記第七巻における或る一日の日記である。場所は図1における越中氷見町(現氷見市)から放生津町(現射水市)まで

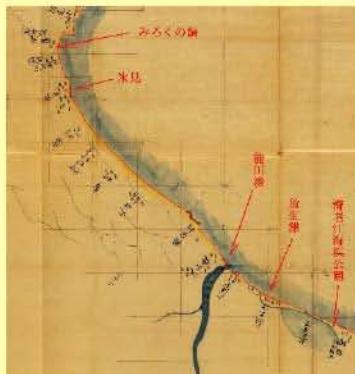


図1 米国議会図書館蔵  
伊能大図83号(部分)



図3 平成の伊能忠敬こと鈴木康吉さん



図2 リヤカーの外観と相棒達

ーの右側面には相棒と呼ぶ守り神の伊能忠敬、午年生まれの干支の馬、無事帰るのカエル、名古屋城のシャチホコにちなんだシャチが手書きされている。図2)を押しながら、伊能測量隊とは逆方向に向かって平成の伊能忠敬こと鈴木康吉さん(図3)が歩いていた。

「どこかでお目にかかりましたよね？」  
康吉「リヤカー引いて歩いているから、どこかで会ったかもしれんなあ」  
「ああそうだ！田中陽輝さんのブログでお目にかかりました」  
そんな出会いでいつぱんに元気になつた。美人すぎてシャツターチの足の腫れがすーっと引いて行くのが感じられ、全身から疲れが消えてゆくのがわかつた。この出会いはオロナミンCもリポビタンDも追いつかないほどの効き目だ。人様から応援を受けるのは人生で初めての経験。

午後三時、閉鎖中の道の駅に到着。八十五歳ぐらいのおばあさんがとぼとぼと乳母車を押して歩いていた。康吉「どうしたんだ？」  
「死にたいけど、死ねん。息子の家族と住んどるが、家にいてもつまらん。相手にしてもらえん」等々。  
一時間ほど「傾聴ボランティア」ら

平成二十七年九月三十日  
(海老江海浜公園)みろくの湯)

雨後晴、見晴台から立山連峰がぼんやりと見えた。そこで三十歳くらいの女性に声を掛けられた。

最高の名言が思わず出たー！  
「お目にかかりましたよ  
ね？」  
康吉「売ってる？？とは言えないが、まあ敢えて言えば『夢を売つてる』かな？」

家に向かって帰途につくおばあさん  
の足の運びは確かに軽く、目はやさしかつた。

午後五時温泉に入る(600円)。  
相変わらず一度の洗いでようやく泡が立つ。温泉を出たら、外は真っ暗。広い駐車場のどこに自分の野宿用のテントがあるのか分からんほどだった。

この平成の伊能忠敬こと鈴木康吉さんの歩行日記は、享和三年の伊能忠敬の測量日記には欠けている人と人との人情味あふれる交流の様子や津々浦々の景観の様子が画像付きで記録されており、伊能忠敬測量日記に欠けているところを補完する素敵な日記になつていて。

この平成の伊能忠敬さんと筆者の接点は次の通りである。すなわち、「伊能忠敬没後二百年記念伊能測量関係子孫交流顕彰発表会」を二年後に開催する予定であり、その際の顕彰対象となる伊能測量関係子孫を探しだす為の情報DBをウェブサイ

おばあさんが  
「何を売つてるの？」。

康吉「売つてる？？とは言えないが、まあ敢えて言えば『夢を売つてる』かな？」

トに開示したので名乗り出でください・・・とのマスコミ発表を平成二十八年二月十五日に行つた。その発表に呼応して「リヤカー引いて、伊能忠敬の足跡を辿っている方に出会いました。名古屋を三ヶ月前に出たと申していましたが、名前もわかりません」という写メールを筆者は受け取つた。

#### メールに添付された写真（図3）

を見て筆者は何やら楽しいものを感じると共に伊能測量関係の子孫かもしれないと思い、その平成の伊能忠敬の消息を求めてウエブ空間をさまよつた。しかしながら見つけることが出来ず、いたところ、半年以上も経つた九月になつてようやくその方の名前が鈴木康吉さんということ及び歩行日記（FBブログ）が存在していることが判明した次第である。

#### 「鈴木さんの動機と計画や実績」

この鈴木さんは中学二年の時、何気なく入つた図書館で偶然にも伊能忠敬の本が目に止まり立ち読みしていながら感動してしまい、以来、忠敬と同じく歩行によつて日本を一周しながら伊能忠敬の足跡を辿りたいとの夢を持つに至つた。その夢を持つに至つたそうである。しかし、この計画の実行はまず生活を安定させてからだ、と夢の実現の時期をじつと自分の胸に秘めていたそ

うである。そうこうしている内に年月が過ぎ、気がつけば忠敬が全国実測測量の壮途についた年代に達していた。そこで思ったことは「今実行しなければ」ということだつた。

そこで、一見無謀にも思えるその計画の具体化にあたつて、気の置けない友人に相談することで迷い揺らいでいる心を固めようと中学時代の友人に出発の四日前になつて相談したのだった。友人は雲をつかむようななども話にビックリも

したが、様々な分野での経験で得た知見から、最後には激励しようといふことになり、本人には気づかなかつた準備すべき物のアドバイスやその品定め、即ちテントの選定、使いこなせそうもないスマホを持つこと、写真を撮ること、毎日連絡すること、あるいはリヤカーに竿を取り付けること並びにリヤカーの四面に手描きのイラストを附けることなど心強い支援の手を差し伸ばしてくれたそつである。

その具体的な計画とは、次のとおりであった。

3月22日、愛知県大府市の自宅出発

第一行程（平成二十七年）

リヤカーには生活用品（野宿用のテント、水、コート、傘、着替え等）を収納し、これを手で引きながらとにかく忠敬と同じように歩いて歩い歩きぬく。およそ一日二十五キロメートル前後の行程で、日本の東

海岸～北海道は反時計回り～日本海側へ出て秋田～山形～新潟～富山～能登～石川へ。その後福井から関ヶ原を通つて自宅のある名古屋に七ヶ月程かけて歩き廻り一旦戻るという行程をとる。それから少し休息後、

第二行程として中国地方の日本海沿海～九州沿海を反時計回りで廻り、その後山陽道を通つて自宅のある名古屋に戻る。最後の第三行程は四国と紀伊半島を廻る。因みに費用を検約するため、原則として野宿を前提とする。

その第一行程は平成二十五年十月下旬に既に終わり、第二行程も平成二十八年九月上旬に終わつた。

その第一行程の状況は歩行日記から抜粋すると次の通りである。（なおこの第一行程の日記は、康吉さんが日々その日の出来事を夜になつて友人に電話、その電話の内容を友人がメモにとつたものである。）

「少なくとも、3、4日は帰つてくるなよ」

口の悪い友人の温かい激励を背に受け裸足にゴム草履で歩き出した。



図4 出発の模様

で中学の友人たちがサプライズの見送りに来ていた。



図5 中学の友人達に見送られながら出発

（3/25、豊橋辺り  
康吉君から緊急連絡）

「リヤカーの車輪（リム）が変形した（お陀仏じやー）。安つい中国製を買ったからなあ。まだ50㍉未満しか歩いてないぞ。おれの人生、やつぱり付いてないワ。」

その事を強力サポーターのT君に相談したところ「自転車屋を探せ」との檄を飛ばされ、折れかかった康吉君の心棒に根性が湧き出て自転車屋を探しまわり、親切な自転車屋さんと巡りあえた。窮すれば通すだ。

以後、康吉君は弱音を吐かず、また振り返る事もせず、前へ、前へ、と歩を進めて行つたのであつた。

（4月1日、4月15日、  
一日20km～30km、リヤカーには必需品40kg。春の海岸線の陽射しは想像以上にキツい。鼻の皮が剥けてきた。行き交う人の声掛けは本当に力になつた。

「絵描きか？」  
「物売りか？」  
「ちょっと恥ずかしかつたが

「歩いて日本の沿岸一回り」  
の看板を取り付けた。

焼津からは土砂崩れで歩く道なし。  
急事態発生で孫娘が車で救援。  
迂回路のR150は人も通行不可。緊  
三保の松原、薩埵峠。景勝地だが、  
富士山は帽子をかぶつて見えない。  
ずっと雨の西伊豆。戸田、土肥、堂

ヶ島、石廊崎、下田、熱川。伊東でやつと晴れ間が見えた。  
石廊崎の灯台で野宿した時は、強風、波と風の音だけで真っ暗。灯台まで行つたら吹き飛ばされそうになつた。

（4月16日、

湯河原の公園で野宿の積りだったが午後5時ですでにクローズ。困り果てて座り込んでいたら目の前を80歳くらいのおばあさんが行つたり来たり。認知症らしく自分の家が分からんらしい。保護すべきか悩んだ。誘拐と誤解されても困ると思いつつ、話してはうちに彼女の記憶が蘇り、家まで送つてあげた。テントの中でおばあさんと一緒に寝ることまで覚悟した。春の宵は粹（？）なことをする。康吉くん無事でよかつたあ。

（4月30日、千葉県銚子市大吠（伊能測量記念碑に敬礼）

（5月2日、千葉県香取市（伊能忠敬の旧宅訪問）  
（5月19日、岩手県気仙沼（大津波の被害に呆然）  
（5月22日、大船渡、三陸町

道の駅で盛岡からの釣り客と合流の飲み会。出された笹かまぼこの美味しさが忘れられない。その方々が口々に言うには「下北には人は居らんぞ。居るのは猿ばかりだ」。

道中頻りに「トツキヨキヨカキヨク」と鳴くホトトギスが旅の友。朝起きる時は「ハヨオキロ」と聞こえ



図7 伊能忠敬旧宅



図6 伊能測量記念碑

（5月27日、八戸（普代村黒崎で伊能忠敬の碑「北緯40度 シンボル塔」と出会い、感激。その頃からリヤカーのパンクが気になり始めたが、修理するための水と容器がなく、八戸のホテルまでなんとかなるだろうと思つてたある朝、たまたまウオーキング中のご親切な人から自宅へ来い



図8 田中陽希さんと遭遇

（6月17日、長万部から洞爺湖（伊能忠敬記念碑）  
（6月19日、黄金駅から室蘭（伊能橋）  
（6月23日、鶴川・節婦  
（二百名山一筆書き踏破の田中陽希さんと遭遇

と言われ、朝ご飯までごちそうになる。）

（6月7日、大間港（今夜は函館と一気にがつかりが全身を覆う。さあか）が待つていた。なんと十一日まで法定検査のため欠航。知つた途端揚句出した結論。うろうろしない。「ローマの休日」ならぬ「おーまの休日」と洒落飛ばした。）

（6月11日、大間から函館へ

（6月17日、長万部から洞爺湖（伊能忠敬記念碑）

（6月19日、黄金駅から室蘭（伊能橋）  
（6月23日、鶴川・節婦  
（二百名山一筆書き踏破の田中陽希さんと遭遇

～6月26日、様似・襟裳・広尾・風  
蓮湖・別海町（伊能忠敬測量最東端  
記念柱）  
訪問

木  
(前夜泊った宿から聞いたからとト  
ラックが追いかけて来た。「峠へ送り  
ますか? リヤカーで行くのは大変だ  
ろう。リヤカーはワインチで荷台に  
載せ、車に乗つて行かんか?」と声  
をかけられた。「歩いて」とリヤカー  
の看板に書いてある手前、有難いが  
歩いて行くと丁重にお断りをした。  
まだ甘えちやいかんとも思った。)

～7月13日、ウトロ  
(前夜泊つた宿から聞いたからとト  
ラックが追いかけて来た。「峠へ送り  
ますか? リヤカーで行くのは大変だ  
ろう。リヤカーはワインチで荷台に  
載せ、車に乗つて行かんか?」と声  
をかけられた。「歩いて」とリヤカー  
の看板に書いてある手前、有難いが  
歩いて行くと丁重にお断りをした。  
まだ甘えちやいかんとも思った。)

～7月14日、斜里・網走・紋別・沢  
温泉ホテル日出の出岬に着く。夕日を  
見送り、明日は朝日を迎える。

宗谷岬まで予定ではあと六日か  
な? 順調だ。数え切れないほどの地  
元の人達の温かい物心両面に渡る励



図9 東端記念柱

ましに加えて、郷里（くに）の仲間  
達が折りにつけ声をかけてくれる。  
出発した時はほんの小さな一つの点  
だったが、いつの間にか応援サポー  
ターが線で結ばれ、今や面になつて  
いる。心強い! 紋とほんなのを言  
うのかのー。)



図11 留萌からのサンセット



図10 野宿の様子

～7月25日、宗谷岬・羽幌温泉・留  
萌（留萌の小平町の入り口のトーネル  
の手前、海岸砂地で野宿。日没が7  
時02分、ばつちり。稚内から狙つて  
いたシャツターチャンス到来。雲の  
切れ具合もよく、遮る物なく空と海  
が真っ赤に染まって行く様をじつく  
り見ていた。至福の時、リヤカーに  
ビールの在庫がない」と以外は。)

～7月25日、宗谷岬・羽幌温泉・留  
萌（留萌の小平町の入り口のトーネル  
の手前、海岸砂地で野宿。日没が7  
時02分、ばつちり。稚内から狙つて  
いたシャツターチャンス到来。雲の  
切れ具合もよく、遮る物なく空と海  
が真っ赤に染まって行く様をじつく  
り見ていた。至福の時、リヤカーに  
ビールの在庫がない」と以外は。)

story and I was happy to know that  
he was your inspiration.  
Inspiration is very important.  
Have a safe trip and please return  
to **名古屋** safely.)

～8月4日、浜益・石狩市・余市・  
神威岬・蘭越・弁慶岬  
(昨日の晩なあ、業務連絡を終え、  
テントで♪月の砂漠をうととつたん  
や。そしたら外人さんが来てなあ、  
最高の夜になつたあ」と弾んだ声。  
外人さんは Todd Wilkinson 4年  
半前に来日。茨城県鹿島市の小学校  
で英語を教えていた。リヤカーの絵  
を見せて伊能忠敬の話から始まり、  
岡倉天心六角堂の美術館で買い求め  
た「広重」「北斎」「歌麿」の絵を広  
げながら、夜の更けるのも忘れて話  
に花が咲いた。夜が明けて、彼は函  
館から船に乗つて帰る由。別れ際に  
トマトを差し出したら、青いバナナ  
をくれた。

Todd からのメッセージ:   
To Mr. Suzuki,  
Thank you for your lesson about  
INOUE. I could understand your

～9月3日、小泊・陸奥赤石・深浦・  
能代・牡鹿半島・脇本・山形吹浦・  
寺泊・柏崎  
～9月27日、姫川・泊駅・氷見・輪  
島・羽咋・安宅の関  
～10月14日、蓮如上人記念館・新  
疋田駅  
～10月21日、関ヶ原・岐阜羽島・  
名城公園・熱田神宮  
～10月24日  
(名城公園～熱田神宮西門)  
康吉君「ゴール! もう白川公園ま  
で着いたぞ!」と八時四十分にケイ  
タイに元気な声。清掃のボランティ  
アさんが年一回の清掃活動で、熱田  
神宮西門へ続く歩道の草引きや掃除

をしてくれている。まるで康吉君のゴールデンゲイトのための清掃のよう。まだかまだかとみんな（伊勢から八名、名古屋周辺から五名）首を長くして待っていると、

康吉君「今、神宮の立体交差点。これからどちらへ行くんだ？」

K君、「迎えに行つくるわ」とケイタイが入る。

K君、「迎えに行つくるわ」と言い終わる前に走つて行った。康吉君の娘さんとお孫さんも駆けつけた。伊勢組は背中に「伊勢」の文字の揃いのハッピ姿。待つ事しばし、歩道の向こうからリヤカーを押し、黄色い帽子の真っ黒な顔。だんだんその姿が大きくなり、迎える皆から拍手が起ころ。康吉君の顔がくしゃくしやで大きな目から涙が幾筋も見える。

ゴールのテープには「鈴木康吉君日本沿岸半周　おめでとう！」。感涙で声にならないけど、身体中で「ありがとう」を叫んでいるのが分かる。赤銅色の肌が歩いた歩数を物語っている。すり減ったゴム草履や靴が二百十七日のすごさを証明している。あなたはただ歩いてるだけと簡単にいうけど、この感動はほんまもの。感動をありがとう。

「今の思いを一文字で書いてくれ」との友人の言葉に、用意した色紙に

「涙」としたためた。漢字の最後の「点」を書いた上に、ほんまものの涙が落ちて、大きくにじんでいた。



図13 相棒のリヤカー



図12 第一行程ゴールを祝う友人たちと

## 第二行程（平成二十八年）

3月20、地元愛知県を出発。敦賀を経て、鳥取、島根、山口、福岡、佐賀、熊本、鹿児島、宮崎、山口、広島、岡山、兵庫、大阪、滋賀、三重、龜山に九月一日に着いたそうです。第二行程からは日々の様子を自らフェイスブックに投稿しています。

<https://www.facebook.com/people/Kinji/Suzuki/100011667013643>

4月9日、道の駅大山恵みの里16時20に着く。歩行距離33km。燕初観測

大山は靄で見えない

6月2日、熊本 7時30分ボランティア集合場所に行く。十人程のボランティアが早くも待っていました。8時30分受け付けの手続きを始め8時30分受け付けの手続きを始め。150人近く集まる。住所氏名年齢を書き、今日の行動の説明をうける。私は4人で二階の荷物を一階に降ろす仕事だった。昭和48年頃に建てられた建築ブームはしりの悪い住宅でした。箪笥冷蔵庫の移動は増改築を生業してきた私には当たり前の仕事です。仕事が早く終わり、セントレーに戻ったのは15時前。報告を済ませて我らは解散。

7月2日、晴れ暑い。

ホテル佐多岬を8時のバスに乗り8時50分根占海浜公園に着く。峠を下り大根占に入る。宗谷岬であつた佐藤蓮君と最南端のこの地で再会あるとは。感激感激だ。



図15 本州最南端表示の看板



図14 熊本地震で潰れた家屋

コーブで買い物しようとカバンの忘れに気がつき1kmを急ぎ戻り、幸い路上に落ちていて安堵した。

県道562から国道448に入る。峠道はきつと体力の限界を感じた。錦江町田代を過ぎて5km先に公園ありの道路標示に希望をいだき国道448を前進。てんしろう森の公園に17時30分。もう先には進めないや。歩行距離23km。

第二行程は九月上旬に無事生還した。

## 筆者の一言

やると思つたらやりとおす。  
偉大なる愚直と粋な心根。  
忠敬先生と同じような！  
人生劇場に乾杯！

## 第一行程(東日本)日程

愛知県:155.4km	福島県:72.5km(25km)	100	6月29日	豊頃	153	8月21日	木古内	200	10月7日	輪島
1 3月22日 碧南	49 5月9日 いわき市	101	6月30日	上厚内	154	8月22日	函館	201	10月8日	道下
2 3月23日 輝豆	50 5月10日 南相馬	102	7月1日	白糠	青森県:427.0km			202	10月9日	富来町
3 3月24日 三谷	51 5月11日 相馬市	103	7月2日	釧路	155	8月23日	大間	203	10月10日	羽昨
4 3月25日 豊橋	宮城県:155.4km	104	7月3日	尾幌	156	8月24日	仏ヶ浦	204	10月11日	宇野気
5 3月26日 田原町	52 5月12日 岩沼	105	7月4日	茶内	157	8月25日	流汗台	205	10月12日	弥生
6 3月27日 伊良湖	53 5月13日 仙台	106	7月5日	姉別	158	8月26日	川内町	206	10月13日	安宅の関
7 3月28日 赤羽	54 5月14日 松島	107	7月6日	根室	159	8月27日	金谷沢	207	10月14日	加賀市
静岡県:378.5km	55 5月15日 石巻	108	7月7日	落石	160	8月28日	有戸	福井県:144.0km		
8 3月29日 浜名湖	56 5月16日 女川	109	7月8日	奥行臼	161	8月29日	浅虫温泉	208	10月15日	三国町
9 3月30日 弁天島	57 5月17日 北上川	110	7月9日	別海町	162	8月30日	蓮田	209	10月16日	水仙の里
10 3月31日 磐田	58 5月18日 本吉町	111	7月10日	標津町	163	8月31日	弁天崎	210	10月17日	河野
11 4月1日 大東町	59 5月19日 気仙沼	112	7月11日	崎無異	164	9月1日	竜飛岬	211	10月18日	新疋田
12 4月2日 御前崎	60 5月20日 唐桑	113	7月12日	羅臼	165	9月2日	小泊	滋賀県:29.0km		
13 4月3日 大井川	岩手県:285.5km	114	7月13日	知床	166	9月3日	高山稻荷	212	10月19日	河毛
14 4月4日 東照宮	61 5月21日 陸前高田	115	7月14日	斜里	167	9月4日	陸奥赤石	岐阜県:50.0km		
15 4月5日 静岡市	62 5月22日 大船渡	116	7月15日	網走	168	9月5日	深浦	213	10月20日	関ヶ原
16 4月6日 田子の浦	63 5月23日 釜石市	117	7月16日	常呂	169	9月6日	大間越	214	10月21日	羽島市
17 4月7日 沼津港	64 5月24日 山田町	118	7月17日	サロマ	秋田県:197.3km			愛知県:37.1km		
18 4月8日 戸田	65 5月25日 浄土が浜	119	7月18日	藻別	170	9月7日	峰浜村	215	10月22日	清州
19 4月9日 土肥	66 5月26日 田老町	120	7月19日	紋別	171	9月8日	宮沢海岸	216	10月23日	名城公園
20 4月10日 堂ヶ島	67 5月27日 田野畑	121	7月20日	日の出岬	172	9月9日	男鹿温泉	217	10月24日	熱田神宮
21 4月11日 雲見	68 5月28日 陸中野田	122	7月21日	風烈布	173	9月10日	赤神社社			
22 4月12日 石廊崎	69 5月29日 久慈	123	7月22日	枝幸	174	9月11日	脇本	徒歩	5818.6km	
23 4月13日 下田	70 5月30日 洋野町	124	7月23日	クッチャロ湖	175	9月12日	秋田市	総合計		
24 4月14日 熟川	青森県:226.5km	125	7月24日	浜鬼志別	176	9月13日	道川	車	25km	
25 4月15日 伊東	71 5月31日 八戸	126	7月25日	宗谷岬	177	9月14日	西目	船	省略	
神奈川県:139.8km	72 6月1日 三沢	127	7月26日	稚内	山形県:110.0km					
26 4月16日 湯河原	73 6月2日 六ヶ所	128	7月27日	稚内温泉	178	9月15日	吹浦			
27 4月17日 小田原	74 6月3日 老部	129	7月28日	抜海町	179	9月16日	酒田市			
28 4月18日 平塚	75 6月4日 東通村	130	7月29日	天塩	180	9月17日	小岩川			
29 4月19日 達子	76 6月5日 凧屋崎	131	7月30日	初山別	新潟県:281.4km					
30 4月20日 油壺	77 6月6日 下風呂	132	7月31日	羽幌	181	9月18日	桑川			
千葉県:322.4km	78~81 6月7日 大間港	133	8月1日	小平町	182	9月19日	荒川町			
31 4月21日 金谷	北海道:2372.0km	134	8月2日	増毛町	183	9月20日	黒山			
32 4月22日 館山	82 6月11日 函館	135	8月3日	浜益町	184	9月21日	寺尾			
33 4月23日 白浜	83 6月12日 恵山温泉	136	8月4日	コタン	185	9月22日	寺泊			
34 4月24日 鴨川	84 6月13日 南鹿部町	137	8月5日	石狩市	186	9月23日	柏崎			
35 4月25日 勝浦	85 6月14日 森町	138	8月6日	小樽市	187	9月24日	摩周湖			
36 4月26日 大原町	86 6月15日 八雲町	139	8月7日	余市町	188	9月25日	名立			
37 4月27日 白子	87 6月16日 長万部	140	8月8日	積丹町	189	9月26日	姫川			
38 4月28日 九十九里	88 6月17日 洞爺湖	141	8月9日	神威岬	富山県:281.4km					
39 4月29日 飯岡町	89 6月18日 黄金	142	8月10日	鬼トンネル	190	9月27日	泊			
40 4月30日 君ヶ浜	90 6月19日 室蘭市	143	8月11日	岩内	191	9月28日	滑川			
41 5月1日 香取市	91 6月20日 登別	144	8月12日	弁慶岬	192	9月29日	海老江			
42 5月2日 同上	92 6月21日 苦小牧	145	8月13日	島牧村	193	9月30日	水見			
43 5月3日 佐原町	93 6月22日 鶴川	146	8月14日	狩場	石川県:346.0km					
茨城県:141.0km	94 6月23日 節婦	147	8月15日	瀬棚町	194	10月1日	和倉温泉			
44 5月4日 鹿島市	95 6月24日 三石	148	8月16日	大成町	195	10月2日	西岸			
45 5月5日 銚田市	96 6月25日 様似	149	8月17日	乙部温泉	196	10月3日	木本			
46 5月6日 水戸市	97 6月26日 えりも岬	150	8月18日	上ノ国町	197	10月4日	真脇			
47 5月7日 日立市	98 6月27日 広尾町	151	8月19日	茂草	198	10月5日	狼煙			
48 5月8日 北茨城	99 6月28日 忠類	152	8月20日	福島町	199	10月6日	中田浜			

## ユネスコ無形文化遺産に 忠敬ゆかりの佐原の大祭が

### 玉造功

写真1は、佐原の大祭夏祭りで、八坂神社の宮司が伊能忠敬旧宅の門前で祈願しているところです。



写真1



写真2

佐原の大祭とは、本宿の鎮守である八坂神社の祭礼（七月の夏祭り）

と新宿の鎮守である諏訪神社の祭礼（十月の秋祭り）を総称したもので、それぞれ神輿が氏子各町内を渡御し、その附祭として山車行事が発展してきました。

江戸の祭礼の影響を受けながら、享保年間ころから山車と囃子を中心とする様々な出し物による練物が祭礼に加わるようになり、幕末・明治期に大人形が山車の飾り物として登場して、今日に至っています。

さて、佐原の祭礼は伊能家とかかわりが深いことから、忠敬の妻みちの祖父にあたる伊能景利の日記や、

忠敬の伊能家婿入りに尽力した伊能豊秋の日記などが佐原の祭礼の史料として知られています。忠敬が祭礼のトラブル解決に奔走したことは指定されています。

佐原の街は、小野川を境にして東側の本宿、西側の新宿に別れます。

紹介しています。

忠敬の嫡孫である伊能忠誨の日記にも、忠誨が永沢次郎右衛門や村役人とともに、神輿の御供をした記録があります。文政六年六月十一日と十二日の日記で、忠誨は数え年で十八歳です。図1は会報第三九号に佐久間達夫氏が翻刻して紹介したもので、文政七年、八年の日記にも祭礼の記録があるようですが、翻刻からは省かれています。日記中の「天王様」は牛頭天王のことで、明治の神仏分離により、牛頭天王社は八坂神社に改められました。

昨年十二月一日、佐原の大祭は全国三十二件の「山・鉢・屋台行事」と一緒にユネスコの無形文化遺産に登録されました。四月二十九日には祝賀の山車行事が計画されています。



図2 八坂神社と諏訪神社の位置

図1 伊能忠誨日記



## 忠敬仲間集う

東京都 山本 公之

千葉県佐倉・国立歴史民俗博物館  
略して歴博の地下資料室、11月22日火曜日のこと、本研究会会員の柏木隆雄氏に誘われて歴博に寄託されている「柏木家に残されていた伊能忠敬関連資料」の閲覧許可にめぐり合えた

当日誘われたのは直近の80号に「シーボルトの息子達とオーストリア貴族との係わり」を発表された田野圭子さん、「伊能忠敬 周辺の人」を連載中の前田幸子さん、79号に「相模の国 大山探訪顛末記 伊能測量隊宿泊先」の大沼晃さんと事務局週一の山本です。

「シーボルト事件関連書簡と書付」から始まり連載されたのが今から8年前の2009年2月の第55号で「柏木家に残された忠敬資料」と題されたもので、これからも興味が尽きない。

写真1は長崎図を囲んでいる忠敬仲間5人です。左から山本・大沼・前田・柏木・田野さん同行のカメラマン・助手です。

もう一枚の写真2は、大和国法隆寺伽藍寺院境内図（彩色）  
既に紅葉の美しく好天に恵まれた一日であった。

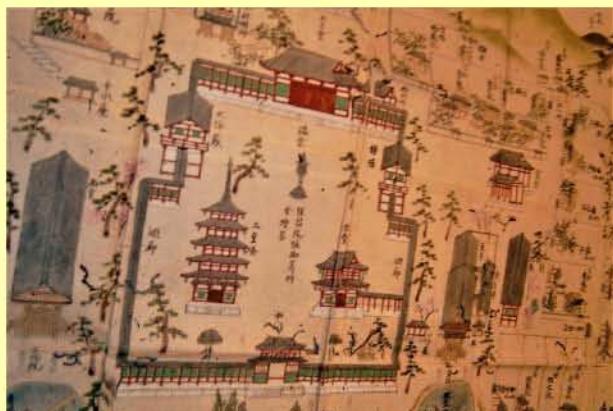


写真2 大和国法隆寺伽藍寺院境内図（彩色）



写真1 長崎図を囲んで

## 伊能忠敬銚子測量記念碑が銚子市に移管

宮内 敏

伊能忠敬銚子測量記念碑は、伊能忠敬銚子測量記念碑建立実行委員会が主体となり、銚子市制施行80周年記念事業実行委員会および伊能忠敬研究会の協力により建立されました。平成25年11月17日に盛大に除幕式が行われ、当日は当研究会から多くの出席者がありました。

その後、記念碑建立実行委員会は解散となりましたが、碑の管理は伊能忠敬銚子測量顕彰会が引き継ぎ管理をしてきました。顕彰会は誘導路の設置や記念碑前の草刈等をしてきましたが、碑他を銚子市に寄贈することとし、去る平成29年2月22日正式に銚子市に受領して頂きました。碑は移管されました。顕彰会は今後も顕彰活動を続けていきます。銚子ジオパークは4年ごとの再認定に昨年末合格しました。

碑の立地場所の屏風ヶ浦地区は銚子ジオパークの主なジオサイトの一つで、昨年、国の天然記念物及び名勝に指定されました。

また、銚子市は「北総四都市江戸紀行・江戸を感じる北総の町並み」として同じく昨年、日本遺産に認定されました。

されました。北総四都市とは佐倉市、成田市、佐原市、銚子市です。

立地条件抜群の記念碑は今まで同様、銚子ジオパークの貴重な文化遺産として観光資源として活用されることが期待されます。



写真3 左は記念碑、右はジオパーク案内板、前は誘導路、バックは屏風ヶ浦で高さ50m長さ10kmに及ぶ海食崖です。理科の教科書にも紹介されています。



伊能忠敬 e 史料館 の URL  
<http://www.jnopedia.tokyo/>

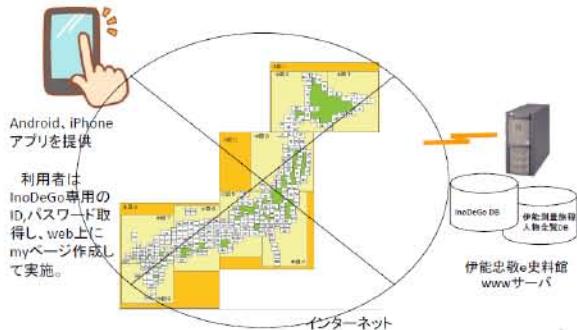
渡辺一郎名誉代表、  
伊能洋理事(伊能家七代目)、  
宮内敏理事(伊能家縁戚)、  
伊能敏雄香取支部長(香取市議)、  
横溝高一(イノペディア)、  
鈴木由生子(事務・受付)



- ・ 最大は46泊で岡山城下である。島の場合は風待ちで宿泊数が多い。
- ・ 伊豆七島17泊がある。熱海の30泊は地図を仕立てていた。
- ・ 主に大庄屋、お寺、大農家に宿泊している。(数名→数十名に隊員が増員)
- ・ 最大は第八次測量で、約三年間出張していた。質疑応答は15時30分に終了しました。

## システム概要

伊能測量は全国を9回にわたり実施されており、Ino De Go は予め決めたコースを選択して実施してもらう。



#### 操作イメージ（スタンプラリー画面2）



操作イメージ（次の拡点へ）

2次 (4回)	昭和4年4月4日 (1969年5月16日) 佐々木 昭 他	出張の際の旅費	
3次 (4回)	昭和4年4月4日 (1969年5月16日) 佐々木 昭 他	出張の際の旅費	
4次 (4回)	昭和4年4月4日 (1969年5月16日) 佐々木 昭 他	出張の際の旅費	
5次 (4回)	昭和4年4月4日 (1969年5月16日) 佐々木 昭 他	出張の際の旅費	
6次 (4回)	昭和4年4月4日 (1969年5月16日) 佐々木 昭 他	出張の際の旅費	
7次 (4回)	昭和4年4月4日 (1969年5月16日) 佐々木 昭 他	出張の際の旅費	
8次 (4回)	昭和4年4月4日 (1969年5月16日) 佐々木 昭 他	出張の際の旅費	
9次 (4回)	昭和4年4月4日 (1969年5月16日) 佐々木 昭 他	出張の際の旅費	
10次 (4回)	昭和4年4月4日 (1969年5月16日) 佐々木 昭 他	出張の際の旅費	
11次 (4回)	昭和4年4月4日 (1969年5月16日) 佐々木 昭 他	出張の際の旅費	
12次 (4回)	昭和4年4月4日 (1969年5月16日) 佐々木 昭 他	出張の際の旅費	
13次 (4回)	昭和4年4月4日 (1969年5月16日) 佐々木 昭 他	出張の際の旅費	
14次 (4回)	昭和4年4月4日 (1969年5月16日) 佐々木 昭 他	出張の際の旅費	
15次 (4回)	昭和4年4月4日 (1969年5月16日) 佐々木 昭 他	出張の際の旅費	
16次 (4回)	昭和4年4月4日 (1969年5月16日) 佐々木 昭 他	出張の際の旅費	
17次 (4回)	昭和4年4月4日 (1969年5月16日) 佐々木 昭 他	出張の際の旅費	

伊能忠敬没200年記念事業

デジタルスタンプラリー Ino De Go

伊能忠敬測量隊の足跡をたどるスタンプラリー!  
単なるスタンプラリーとは違い、スマホを使って測量隊の宿泊地に到着できたら、スマホの画面をタッチすることでスタンプが押されるIT時代のスタンプラリーです。

測量ルートはスマホがナビゲート。  
参加者は徒歩、自転車、バイク・車、鉄道等の交通手段を使って、現地へ行き、スマホの画面をタッチ。

航空機等で上空からのデジタルスタンプは不可



伊能忠敬 e 史料館  
<http://www.jnopedia.tokyo/>

#### 操作イメージ（スタンプラー画面1）

スマホで 2次測量（伊豆）コースを選択して開始した例



コードを運転すると現在地を中心に★表示

ビンの番号は江戸を出発してからの日数を示す。

卷首語

<http://www.inopedia.tokyo/database/gmap/route/circle04.html>

操作イメージ(スタンプ)

デジタルスタンプ対象域に落とすことを確認したら、ここで画面をクリックするとデジタルスタンプが押されます。



更多資訊請點此看更多 (請點全佈局頁面) [點此看更多](#) [點此看更多](#)

## 新入会員自己紹介

長野県 嶋田秀樹



この度、伊能忠  
敬研究会長野県会  
員の市川美津夫氏  
のご紹介により入  
会しました。教員  
を定年退職した後、  
和算の研究やアフリカの孤児支援等  
をしています。

伊能忠敬については、以前より関  
心をもつて資料を蓄積して来ました  
が、在職中に子どもたちの「信州・  
須坂の測量」に関する学習活動を援  
助した実践を、本冊子に掲載させて  
いただきました。別稿の  
報告記事等を通読の上、感想や疑問  
点等をお寄せいただければ嬉しく思  
います。

また、現在の研究課題は、伊能忠  
敬が第八次測量で信州・善光寺参詣  
の後に、どうして遠方の飯山まで赴  
き、あえて谷街道・須坂・中仙道を  
通つて江戸に帰還したか、という初  
歩的な疑問です。理由が推論できる  
方、あるいはその根拠を示す資料等  
をお持ちの方は是非とも連絡いただ  
ければ幸いです。

もとより十分に古文書も読めず、  
専門的な知識もなく、伊能忠敬の研

究に関しては浅学の徒です。諸先輩  
方のご指導・ご鞭撻をいただきたく、  
宜しくお願い申し上げます。

茨城県 荒井 忠秋  
趣味 歴史研究 古文書解読  
所属など 白河史耕会主宰、福島県  
史学会会員、  
著書 『荒井次郎右衛門慶応日記』  
『戊辰の墓標』(3部作)、史学  
会誌、雑誌発表など



私は5年前、  
長年従事した  
㈱N T Tデー  
タの銀行コン

ピュータシス  
テム開発部門  
歴史研究を行う傍ら、地域に残る古  
文書解読のための学習を続けてきま  
した。数年前、渡辺一郎名誉会長よ  
り伊能忠敬測量日記の手ほどきを受  
けて以来、伊能忠敬先生その人とと  
もに、測量日記に現れる人物、寺社  
や生活風土、当時の諸藩の制度など  
に強く感心を持つようになりました。

私たち姉妹は幼少の頃より、伊能  
忠敬がお昼時、家に寄り休息され  
た、耳にたこが出来るほど聞かされ  
て育つた経緯があります。故に、歴  
史上の偉人で一番最初に覚えた名前  
が伊能忠敬です。

埼玉県 稲葉 末明

福岡県 稲吉 正明さん  
千葉県 川村 優さん  
趣味 ゴルフ  
専門 安全工学  
入会動機 佐原出身につき、伊能忠  
敬をもつと知りたい。  
意見 広く後世に伝えていきたい。  
著書 『荒井次郎右衛門慶応日記』  
『戊辰の墓標』(3部作)、史学  
会誌、雑誌発表など

計報

福岡県 曾根田 馨さん  
福岡県 松本 和典さん  
福岡県 松尾 政信さん

### その他の新入会員

神奈川県 清水 祥さん  
三重県 岩本 敏さん  
(80号で紹介)

私は5年前、  
長年従事した  
㈱N T Tデー  
タの銀行コン

福岡県 神崎 亮さん  
(80号で紹介)

ご冥福をお祈り申し上げます。

## 『伊能忠敬研究』投稿要領

### ①原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。  
\*刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字（704字×三段または480字×四段）です。  
長い原稿の場合は連載として分割していただきたいことがあります。

### ②原稿のかたち

・本文（テキスト） 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。  
・写真 一般的なJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350ppi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。  
\*印刷サイズが100mm×75mmで350ppiのカラー写真の場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラによつて5Mモード以上で撮影された画像ファイルにありませんが、カメラ付き携帯電話で撮影された写真は無理な場合があります。  
わからない場合はレ判（127mm×89mm）程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。  
・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキャナで撮った電子ファイル（JPEG形式またはTIFF形式）にしてください。

### ③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものをお送りください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およそそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷上り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。（詳しくは本誌六七号および六八号を参照）

### 送り先

・電子メール添付の場合 [kaih@inoh-ken.org](mailto:kaih@inoh-ken.org)  
・郵送の場合 〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6日本地図センター2階  
伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

### ④注意事項

・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。  
・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って許可を取つておいてください。  
・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。  
・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があつた場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。  
・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとつておいてください。

## 伊能忠敬研究会御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行つております。

- ①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年三回発行
- ②例会・見学会の開催
- ③忠敬関連イベントの主催または共催
- ④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、伊能忠敬研究会事務局所在地  
〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2階

電話・FAX 03-3466-9752

事務局メール [mail@inoh-ken.org](mailto:mail@inoh-ken.org)  
郵便振替口座 〇〇一〇〇六一〇七一八六一〇

ホームページ <http://www.inoh-ken.org/>

### 伊能忠敬研究会関係ホームページ

○伊能忠敬e資料館 「Inopedia（イノペディア）」伊能忠敬と伊能図の大事典  
○伊能忠敬研究会・資料室 現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図  
および史料  
<http://www.inopedia.tokyo/>

○「伊能忠敬図書館」忠敬関係の文献、画像資料  
<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/~koko>

編集後記 ◇今号も発行が予定より少し遅れてしまった。◇締め切りを守つて原稿をお送りいたいた皆さんには大変申し訳なく思つてゐる。◇今号が予定通り進まなかつた原因は原稿不足である。前号の80号は比較的原稿が集まり、掲載を一部先送りするほどであつたが、今号は原稿が集まらず、前号の先送り分を掲載することにしたが、掲載時期がずれたこともあり、修正が必要な原稿も出でた。◇また、著者の方たちも原稿を提出してから時間が経つてしまい、提出したことを見失してしまふ人もいた。◇メールで不足している資料を依頼しても返事がない人もいる。◇そのため、掲載を断念せざるを得ないものもあり、少ない原稿がますます少なくなるという悪循環に陥つた。◇なるべく多くの会員の皆さんの投稿をお待ちする。◇また、毎回お願いしているが、このページにも掲載している投稿要領を守つていただき、編集担当の作業軽減に協力していただきよう、切にお願いする。T・H

次号（第82号）は2017年6月発行  
原稿〆切は4月30日の予定です。

皆様からの投稿をお待ちしております！